

2022 年 12 月

食料安全保障月報

(第 18 号)



令和 4 年 12 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 12 月食料安全保障月報（第 18 号）

目 次

概要編

I	2022 年 12 月の主な動き	1
II	2022 年 12 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「中国の穀物生産・貿易動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 輸出価格が高水準で 2022/23 年度の輸出量は低迷	
	＜カナダ＞ 普通小麦、デュラム小麦とも、品質は前年度に比べ良好	
	＜豪州＞ 生産量は前月予測から上方修正され、史上最高の 36.6 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 土壌水分は十分となり、2023/24 年度の冬小麦の生育は順調	
	＜中国＞ 10 月の小麦輸入は、カナダ、米国からの輸入シェアが大幅に増加	
	＜ロシア＞ 輸出が好調となり 10 月、11 月は前年同月を上回る輸出量	
	＜ウクライナ＞ 輸出量は上方修正も、前年度に比べ 33.7%減少の 12.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 35%減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の価格が高止まり。輸出量は減少	
	＜インド＞ ラビ米の作付けは前年度よりも速いペースで進捗	
	＜中国＞ 収穫は 11 月末に終了。南部の干ばつ等で前年度より減産。	

<タイ> 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し
<ベトナム> 中国やインドネシアからの需要が増加

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1

<米国> 生産量は減産、輸出減の見通し

<ブラジル> 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

<アルゼンチン> 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.7 倍（輸出税継続）

<中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

<カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

【利用上の注意】

表紙写真：ウクライナ・ポルタバ州のとうもろこしの収穫（12 月 1 日撮影）
降雨過多で収穫が遅れた。

(概要編)

I 2022 年 12 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫がほぼ終了し、南米では生育期を迎えている。

品目別にみると、12 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているものの、高水準で推移している。11 月 19 日に期限を迎えたウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 120 日間(2023 年 3 月 19 日)延長された中、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、米国や欧州の乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：11 月）については、10 月から概ね横ばいで推移（135.9→135.7）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年 11 月の値は 135.3、前々年 11 月の値は 105.6）。

海上運賃については、前年 10 月に、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が前年 10 月に、2008 年のリーマン・ショック後の最高値を記録したものの、本年 12 月は、その最高値から 7 割程低下し、直近 5 カ年の平均値とほぼ同じ水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、12 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の12月16日報告によると、2022/23年度の小麦は収穫が終了し、収穫予定面積のほぼ100%に当たる1,940万トンが収穫された。とうもろこし等の夏作物も収穫が本格化し、とうもろこしは収穫予定面積の70%に当たる1,840万トンが収穫された。

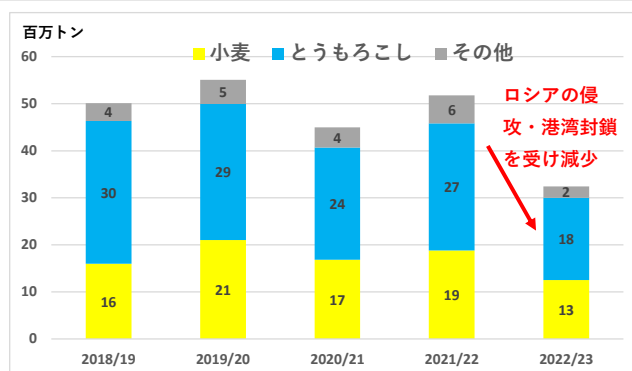
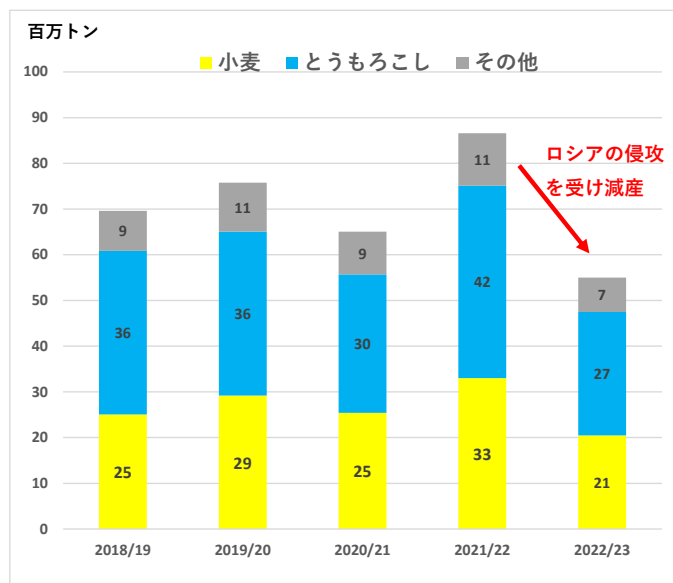
2023/24年度の冬小麦の作付けは、11月28日報告によると計画の95%に当たる380万ヘクタールが終了した。

7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（当初11月19日まで）を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開されており、さらに、11月には2023年3月19日まで延長された。11月30日時点で、輸出量は1,234万トン（うち、とうもろこし516万トン、小麦359万トン他）。目的地はスペイン、トルコ、中国、イタリア等。

米国農務省（USDA）の12月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量は、前月見通しから変更はなく2,050万トン（対前年度比38%減）、輸出量は前月から150万トン上方修正され1,250万トン（同34%減）の見通し。

一方、とうもろこしの生産量は、収穫期の降雨過多やロシアの攻撃による収穫遅れにより前月から450万トン下方修正され2,700万トン（同36%減）、輸出量は、前月見通しから200万トン上方修正され1,750万トン（同35%減）の見通し。

（参考）ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.12)

1 米国の穀物輸出は伸び悩み

2022/23 年度の米国のとうもろこし、大豆は 11 月中旬でおおむね収穫が終了した。小麦はすでに収穫が終了している。米国農務省の 12 月見通しで、生産量は前月と比較して変更はなかったが、夏季のコーンベルトの一部での高温乾燥の影響から、とうもろこしは対前年度比 8 % 減の 3 億 5,380 万トン、大豆は対前年度比 3 % 減の 1 億 1,830 万トン、小麦は前年度よりわずかに増加の 4,490 万トンと見込まれている。

輸出量は、とうもろこしは前年度比 16 % 減の 5,270 万トン、大豆は同 5 % 減の 5,570 万トン、小麦は同 3 % 減の 2,110 万トンが見込まれている。

ミシシッピ川流域の降雨不足により、10 月の水位が 1927 年の観測開始以来の最低水準となり、11 月以降も低水位が継続しており、はしけ運賃は高水準で推移していること等から他国産と比べ輸出競争力が劣ることが要因とみられている。なお、農産物や食料品の輸送に影響があるとして懸念されていた鉄道ストライキについては、12 月 2 日にバイデン大統領が貨物鉄道スト回避法案に署名し、回避された。

2 豪州の小麦、菜種は史上最高の豊作見通し

豪州農業資源科学局（ABARES）の 12 月 6 日公表のクロップレポートによれば、2022/23 年度の収穫期を迎える冬作物は、ウェスタンオーストラリア州やサウスオーストラリア州等で天候に恵まれ史上最高となるなど、豪州全体でも史上 2 位の 6,200 万トンとなる見通し。小麦と菜種に関しては、それぞれ 3,660 万トン（対前年度比 1 % 増、過去 5 年対比 51 % 増）、730 万トン（同 4 % 増、80 % 増）となり、過去最高であった 2021/22 年産を上回る見通し。大麦は史上 4 位の豊作となる 1,340 万トン（同 4 % 減、18 % 増）の見通し。

一方、ニューサウスウェールズ州では、降雨過多や洪水の影響で前年度より減産となる見通し。

2022/23 年度の作付けが終了した夏作物については、ソルガムは史上 4 位の 260 万トン（対前年度 4 % 減）が見込まれているが、コメについては 降雨過多により作付面積が大幅に減少し、前年度より約半減となる 34 万トン（もみベース）の見通し。

3 カナダ穀物・油糧種子は前年の干ばつから大きく回復する見通し

カナダ統計局の 12 月 2 日公表の 2022 年の主要作物の生産見通しによれば、過去最高の 2020 年の水準には及ばないものの、天候に恵まれ、前年の西部の干ばつによる減産から大きく回復する見通し。なお、9 月公表時点より下方修正された。

主に、カナダ西部で栽培されている小麦については、収穫面積、単収とも前年より増加し、史上 3 位の豊作となる 3,380 万トン（対前年比 52 % 増、過去 5 年平均対比 10 % 増）。うちデュラム小麦は 540 万トン（同 79 % 増、7 % 増）となっている。菜種については、収穫面積は減少したものの単収が大幅に増加し、1,820 万トン（同 32 % 増、5 % 減）。大麦についても同様に、収穫面積は減少したものの単収が大幅に増加し、1,000 万トン（同 44 % 増、13 % 増）の見通し。

一方、カナダ東部で主に栽培されている大豆については、収穫面積は減少したものの単収が増加し、650 万トン（同 4 % 増、4 % 減）の見通し。

Ⅱ 2022 年 12 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月末、280ドル/トン台前半で推移。12月に入り、黒海諸国からの小麦供給が潤沢なことや、豪州の豊作等から250ドル/トン台後半に値を下げたものの、ロシアの攻撃でウクライナの港が一時閉鎖されたことに伴うウクライナからの穀物輸出の不透明感や、米国産の輸出需要への期待から270ドル/トン台後半に値を上げた。その後、世界の景気の減速懸念等から値を下げ、12月下旬現在、270ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、11月末、260ドル/トン前後で推移。米国の輸出需要低迷の懸念等から、12月上旬に240ドル/トン半ばまで一時的に値を下げた。その後、ロシアの攻撃でウクライナの港が一時閉鎖されたことに伴うウクライナからの穀物輸出の不透明感や、米国の輸出成約が好調となったこと、大豆価格のつれ高等から緩やかに値を上げ、12月下旬現在、250ドル/トン台後半で推移。

コメは、11月末、470ドル/トン前後で推移。12月に入り、更なるバーツ高や、インドネシアにおける政府備蓄不足に対処するためのタイからの輸入等により値を上げ、12月下旬現在、490ドル/トン台前半で推移。

大豆は、11月末、540ドル/トン前後で推移。12月当初、米国環境保護庁（EPA）によるバイオ燃料消費義務量の提案が市場予想を下回ったことなどから520ドル/トン台半ばまで値を下げた。その後、アルゼンチンでの干ばつの影響を懸念した大豆粕価格の上昇、中国のゼロコロナ政策の緩和の動きに伴う大豆輸出が拡大するとの楽観的な見方等から値を上げ、12月下旬現在、540ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 840 万トン下方修正され 27.4 億トン。消費量は、前月予測から 680 万トン下方修正され 27.7 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.4 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.7 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

（注：数値は 12 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 による）

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.2%となる見込み。

（注：数値は 12 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」 による）

V 今月の注目情報：中国の穀物生産・貿易動向

2022年の中国の食糧生産（穀物・豆類・イモ類）は、長江流域で夏季の干ばつの影響があったものの、東北から北部の穀倉地帯では天候に恵まれ、国家統計局によれば前年度を0.5%上回る6億8,700万トンとなった。

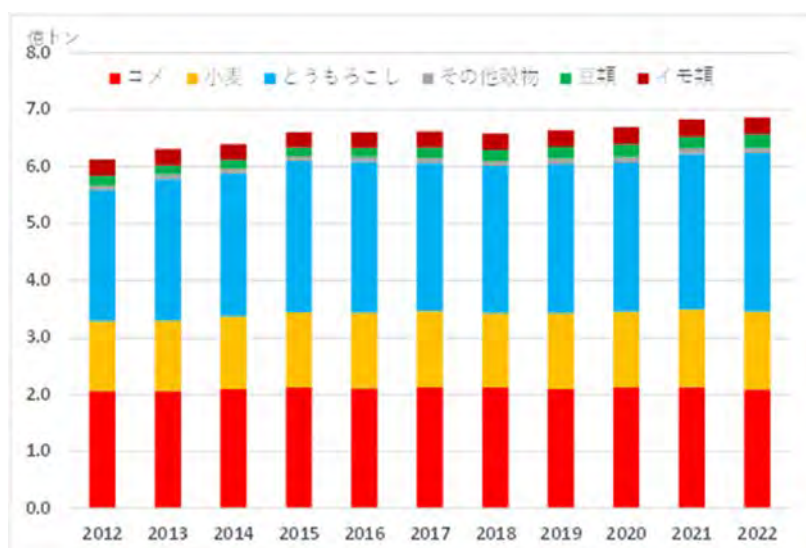
一方、穀物需要については、2022年は経済の減速などから伸び悩んだものの、ロシアの侵攻を受けたウクライナや米国からの輸入減少を受けて、11月にはブラジル産とうもろこしの輸入を開始した。12月7日には中国政府がゼロコロナ政策の緩和を公表したが、今後の見通しも含め、中国の穀物生産と貿易動向、世界の穀物需給への影響についてまとめた。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、中国のとうもろこしは2022年10月から2023年9月。国や作物によって異なる（品目別需給編P.27参照）。

1. 中国の穀物生産動向

12月12日公表の国家統計局「2022年糧食生産量データ」によれば、2022/23年度の中国の食糧生産（穀物と豆類とイモ類）は6億8,653万トン（コメはもみベース）の見通し。対前年比0.5%増産となり、8年連続で13,000億斤（1斤=500gで6億5,000万トン相当）の生産目標を達成した。中でも大豆生産の増加が目立っている。地域別では特に前年洪水の影響があった河南省で本年は天候に恵まれ、生産量が回復する見通し。

図1 中国の穀物、豆類、イモ類の生産量の推移



出典：中国国家統計局資料(2022.12.12)を農林水産省で加工

(1) 小麦

播種面積は前年をわずかに下回った

が、単収が1.0%増加したことから、生産量は前年比0.6%増で史上最高の1億3,772万トンの見通し。2021年末の降雨過多により作付け遅れとなったが、その後の生育が順調であったことが単収改善の要因とみられる。

(2) とうもろこし

単収が前年比2.3%増加し、大豆振興政策による作付面積の減少(0.6%)をカバーし、生産量は前年比1.7%増で史上最高の2億7,720万トンとなる見通し。主産地の東北地区が天候に恵まれたことにより単収が増加したと推測される。

(3) コメ

播種面積が前年比1.6%減少したことや、ジャポニカ産地の東北地区は天候に恵まれたものの、インディカ産地の長江流域の夏季の干ばつなどの影響から、コメ全体で単収が0.5%低下したため、前年比2.0%減の2億850万トン（もみベース）となる見通し。

(4) 大豆

とうもろこしとの複合栽培の奨励を含め、強力な大豆振興政策により、播種面積が前年比21.7%増加し、単収も1.6%増加したことから、前年比23.7%増となる史上最高の2,029万トンの見通し。

2 需要と輸入動向

米国農務省（USDA）の12月見通しによれば、2022/23年度の中国の穀物（小麦、とうもろこし、精米等）需要量は、前年度比1%減の6億1,885万トンとなっている。中国の穀物需要量が前年度を下回るのは、その前年度が大きく不作となった2004/05年度以来である。背景には最近の中国の経済減速や、12月まで実施されていたゼロコロナ政策などの影響もあるとみられる。

一方、大豆については、畜産向けの大豆需要の増加から、前年度を上回っている。

(1) 小麦

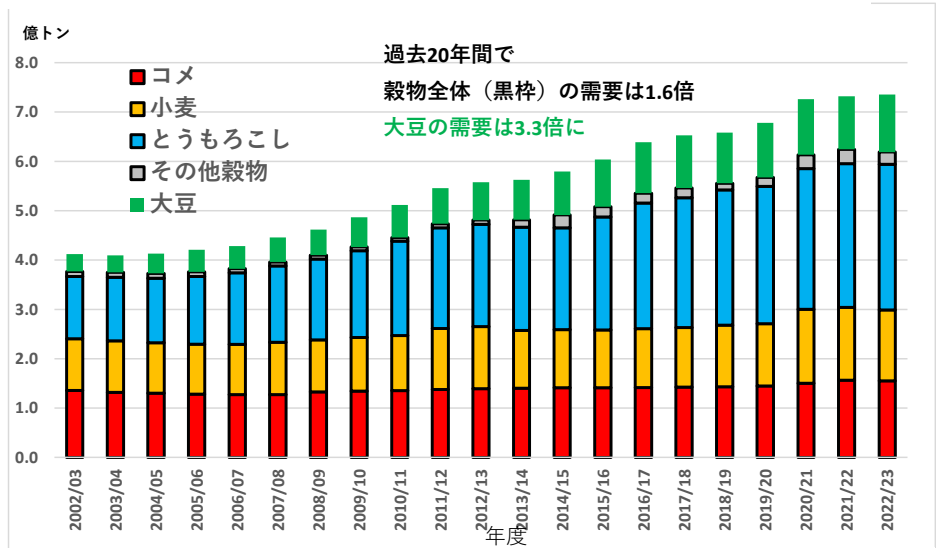
USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度より3%減の1億4,400万トンの見込みである。2019/20年度は、アフリカ豚熱の発生を受け減少していた畜産向け飼料需要の回復に伴い、とうもろこし価格が高騰し、小麦の取引価格を上回ったため、代替としての飼料向け的小麦需要が増加した。しかし、2021/22年度以降、とうもろこしの価格が小麦を下回った結果、小麦の需要は減少に転じている。

2022年の輸入については、前年同月を上回るペースで、輸送距離が近い豪州産を輸入してきたが、10月にはカナダ産、米国産の輸入量が大きく増加し、同月の輸入量は合計で前年同月の48万トンを大きく上回る124万トンとなった。この結果、1～10月の輸入量は780万トンと前年同期比97%となっている。10月に米国、カナダ産の輸入が増加した背景には、7月のウクライナの黒海から穀物輸出合意や米国・カナダ産春小麦の増産見通しなどによる小麦相場下落も要因と考えられる。

(2) とうもろこし

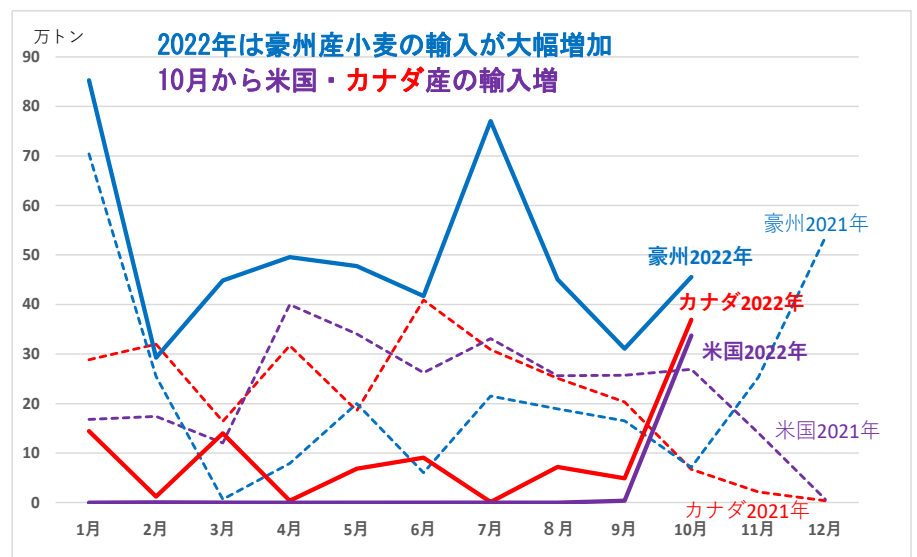
USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度比1%増の2億9,500万トンの見込みである。一時期小麦の価格を上回っていたとうもろこし価格が小麦の価格を下回って推移している

図2 中国の穀物、大豆需要の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2022.12）を農林水産省で加工

図3 中国の米国、カナダ、豪州からの小麦輸入量の推移



出典：中国海関統計を農林水産省で加工

ことから、飼料需要を中心に伸びているとみられる。

中国は主に、米国とウクライナから輸入してきたが、2022年の輸入量については、2月のロシアのウクライナ侵攻によるウクライナからの輸入とともに、米国からの輸入が大きく減少したことから1-10月の輸入量は1,901万トンと前年同期比72%と大きく減少している。輸入量に占める米国産のシェアは7割以上となっている。

しかし、これまでほとんど輸入していなかったブラジル産とうもろこしに関し、本年5月に検疫条件などで合意しており、報道等によると、中国海関（税関）が11月上旬に、ブラジル産とうもろこし輸出業者リストを更新し、11月下旬には輸入が開始された。

(3) コメ

USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度より1%減の1億4,700万トンの見込みである。長江流域の干ばつによる減産もあったが、食用需要も頭打ちとなっており、中長期的な動向にも注意する必要がある。

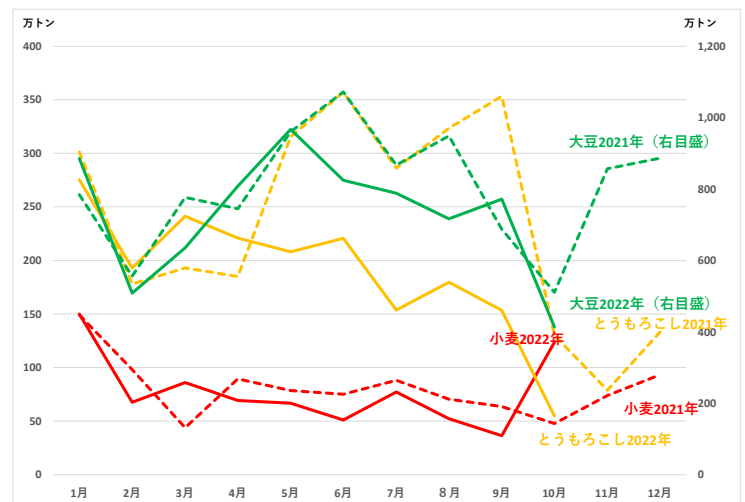
2022年の輸入については、2月以降、前年同月を上回るペースで輸入増加しており、1-10月の輸入量は、542万トンと、前年の年間輸入量（387万トン）を上回った。小麦やとうもろこしの国際価格高騰により、飼料向け需要を中心に代替として、比較的低価格のインド産碎米の輸入が増加したことが背景にあるとみられる。ただし10月の輸入量は9月より減少したが、この背景として、干ばつの影響を受けたインドの9月からの碎米の輸出禁止や小麦などの国際価格の下落等があるとみられる。

(4) 大豆

USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度より9%増の1億1,660万トンの見込みであり、畜産向け需要の増加に伴い増加する見通しである。

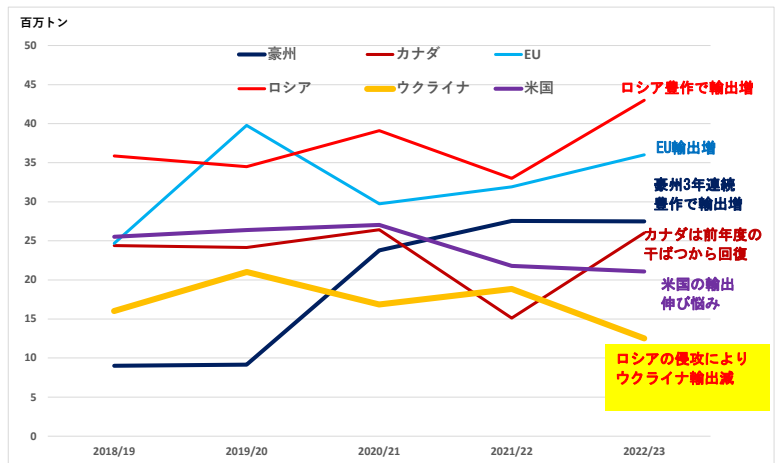
しかし、2022年の輸入については、1-10月の輸入量は7,320万トンで前年同期比93%と減少している。輸入量のうち67%をブラジル産が占め、米国産のシェアは28%と前年（34%）より低下している。輸入量減少の背景として、大豆の搾油マージンの悪化などがあるとみられている。

図4 中国の小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



出典：中国海関統計を農林水産省で加工

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.12)を農林水産省で加工

3 国際貿易への影響

(1) 小麦

主要輸出国では、ロシアの侵攻を受け減産見通し（USDAによると2,050万トン）となっているウクライナを除き、豪州で3年連続豊作（同3,660万トン）となり史上最高を更新し、ロシアでも史上最高の豊作（同9,100万

トン)が見込まれている。カナダでも干ばつだった前年度を大きく上回り、過去5年平均を上回る見通し(同3,382万トン)。このような主要輸出国の豊作見通しやウクライナからの輸出再開を受け、ウクライナ侵攻前の水準まで国際相場が下落した。

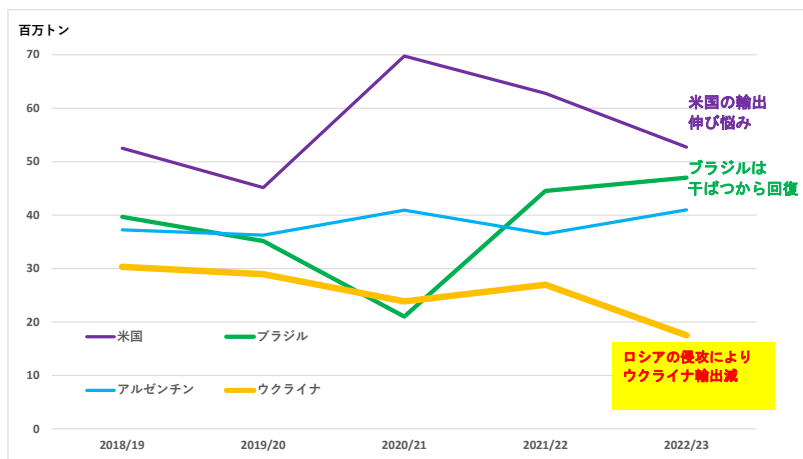
12月7日のゼロコロナ政策の緩和を受け、今後中国の輸入が増えるとの見方もあるが、今のところ目立った動きはない模様である。最近の豊作もあり、中国における小麦の備蓄が十分にあることが背景にあるとみられる。

(2) とうもろこし

主要輸出国では、小麦と同様に、ロシアの侵攻によりウクライナで減産(同2,700万トン)、輸出量も減少、米国でも中西部の高温乾燥で減産見通し(同3億5,380万トン)のため輸出が伸び悩んでいる。輸入国側では、EUが夏季の干ばつにより減産となり、輸入量は中国の輸入量を上回る見通しである。

一方、ブラジルでは2021/22年度の冬とうもろこしが豊作となったことから、EUを始め各国からの需要が集中している。冬とうもろこしの収穫が終了した11月に中国もブラジル産の輸入を開始した。ただし、業界関係者の中では、中国によるブラジル産の輸入が本格化するのは2023年に入ってからとの見方もある。

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.12)を農林水産省で加工

(3) コメ

インドの輸出規制や洪水の影響を受けたパキスタンの輸出減少により、中国の10月のコメ輸入は減少した。しかし、中国のコメも減産となっており、豊作見通しのタイ産への切り替えも含め、今後の輸入動向に注視が必要である。

(4) 大豆

米国が前年度より減産となったが、ブラジルでは適度な降雨に恵まれて作付けが順調に進展し、生産量の見通しは1億5,000万トンを超えることから、世界の大豆の在庫率は27%と前年度より上昇する見通しである。

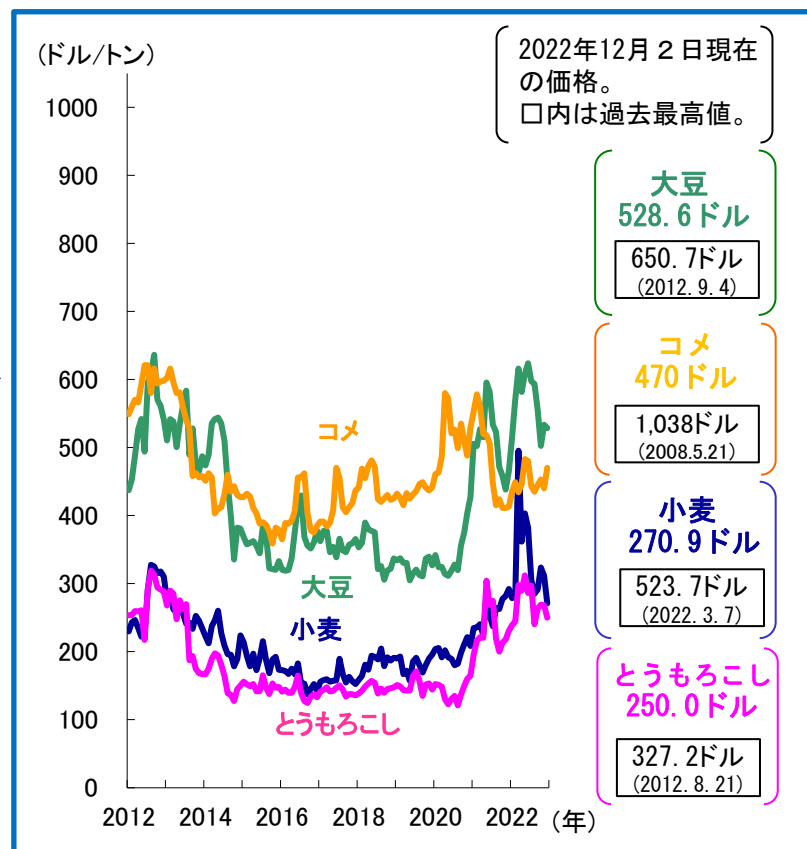
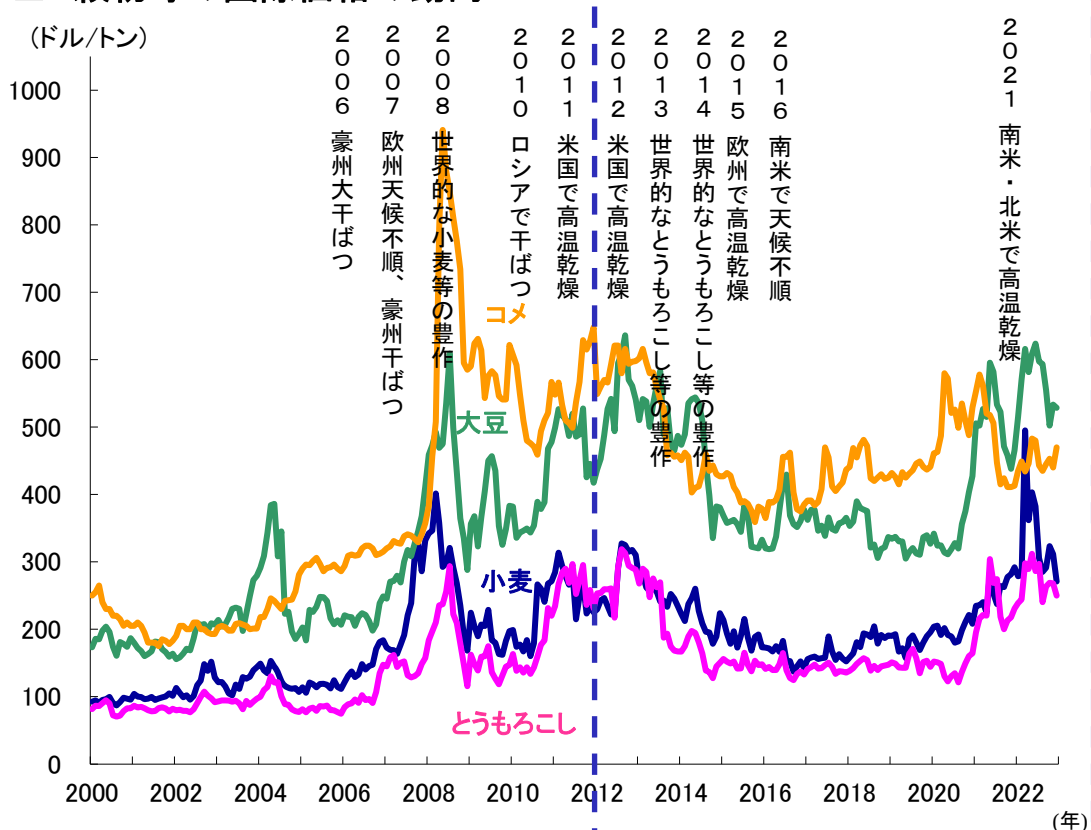
このような状況の中、ゼロコロナ政策の緩和を受け、中国経済が活発化し、需要増加期待からシカゴの大豆相場が一時上昇した。小麦やとうもろこしと異なり、この時期、南米産大豆は作付けから生育期で、輸出が可能なのは米国産に限られることが背景にあるとみられる。

しかし、ゼロコロナ政策の緩和後、中国国内で感染者が急増しており、中国内の物流が混乱しているとの報道もある。現時点でゼロコロナ政策緩和が中国の穀物需要や輸入にどのような影響を与えるか見極めるには不確定要素が多いが、引き続き、中国の穀物需要や輸入状況を注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



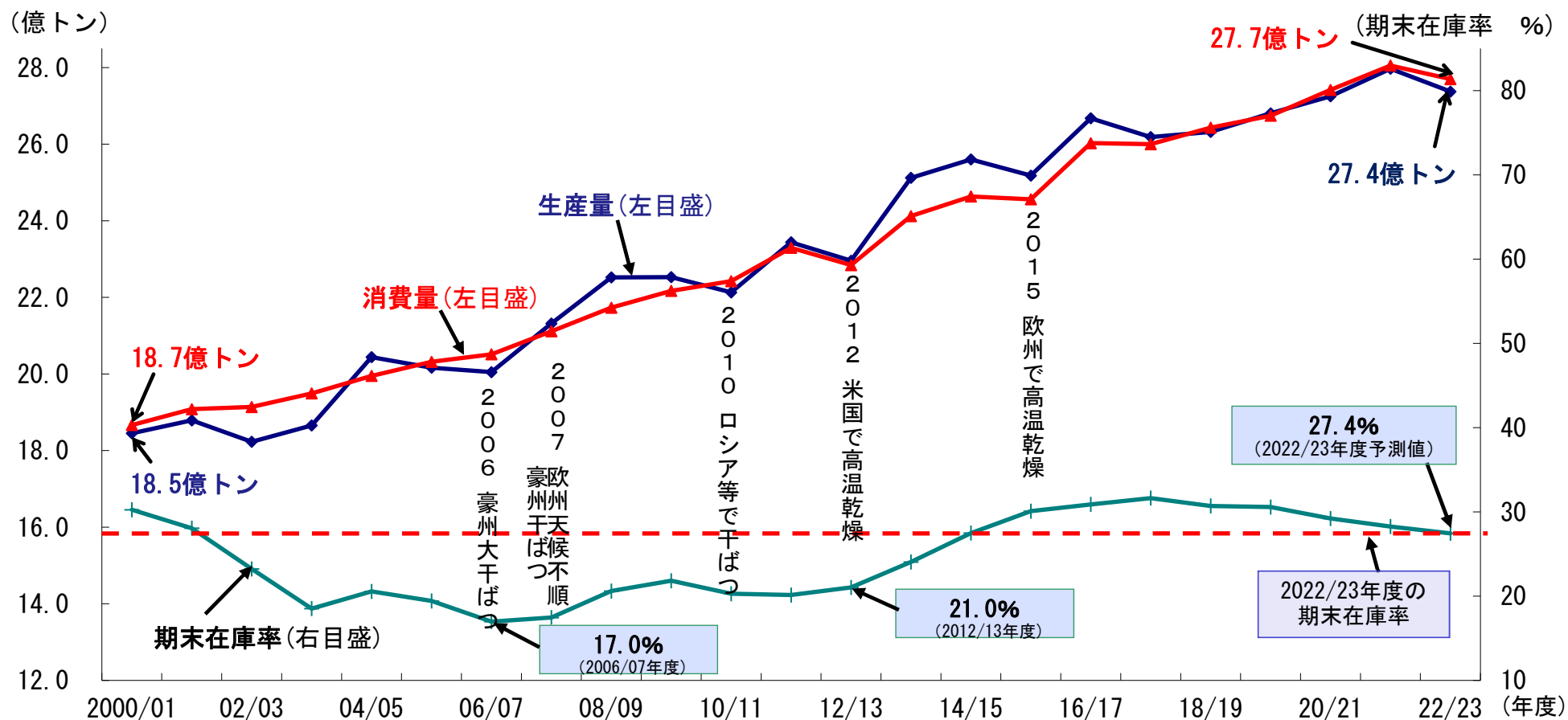
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、2022年12月2日現在のコメ価格は、2022年11月30日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

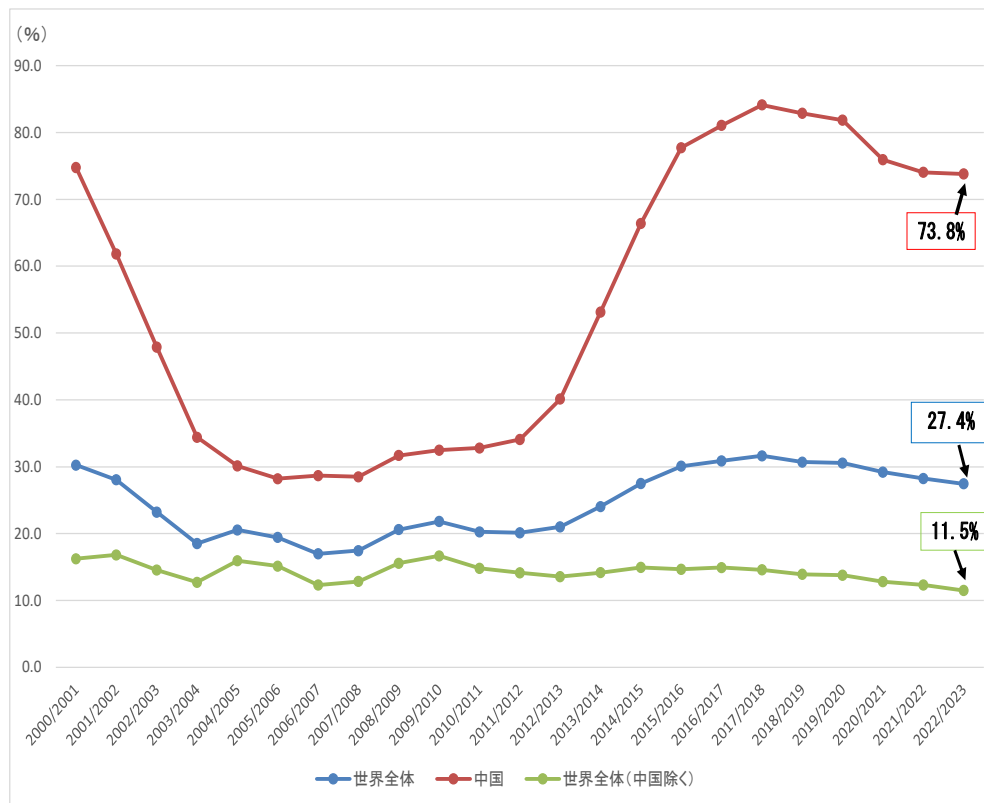


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2022)、「PS&D」

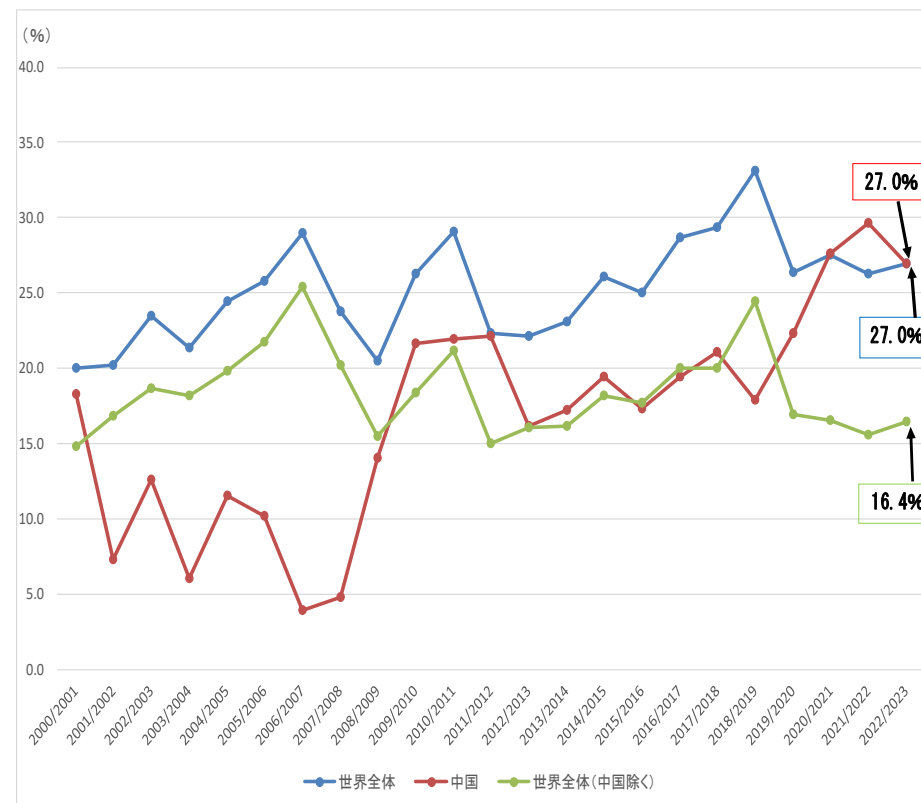
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(December 9, 2022)

注：1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等（大豆除く）。

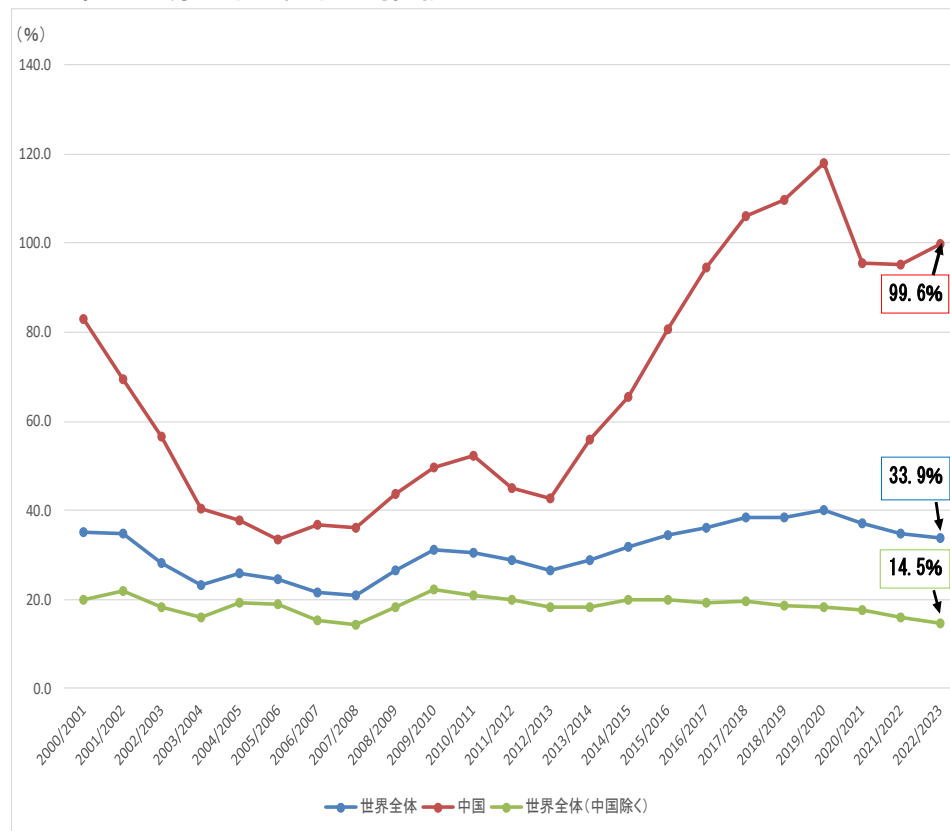
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

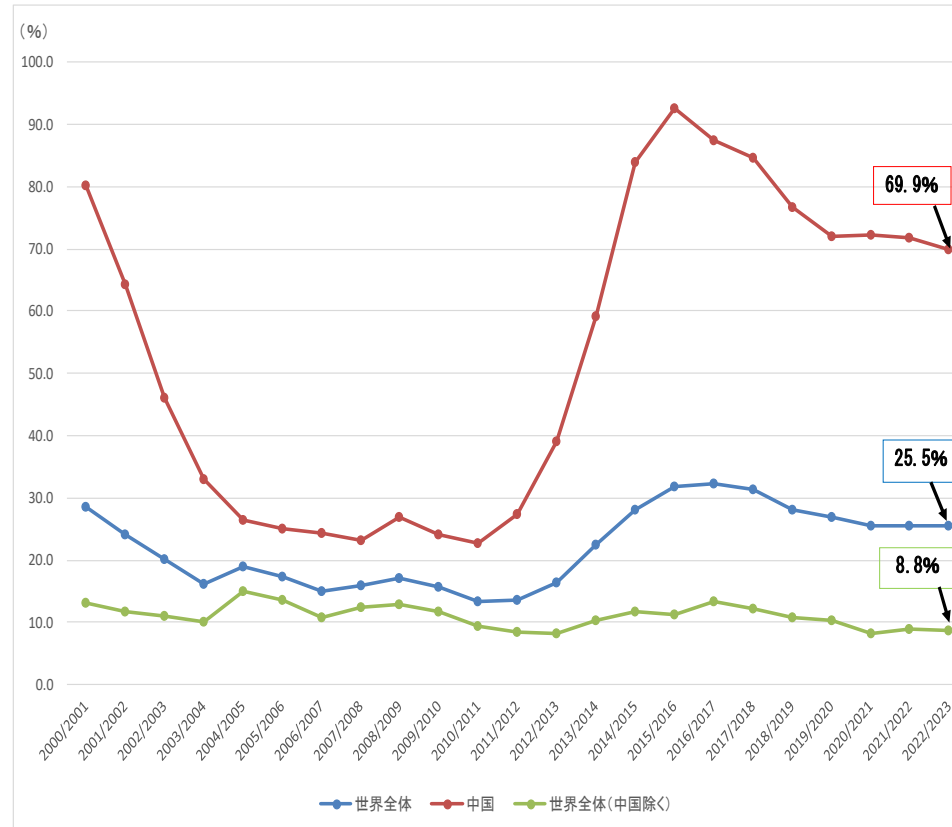
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(December 9, 2022)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

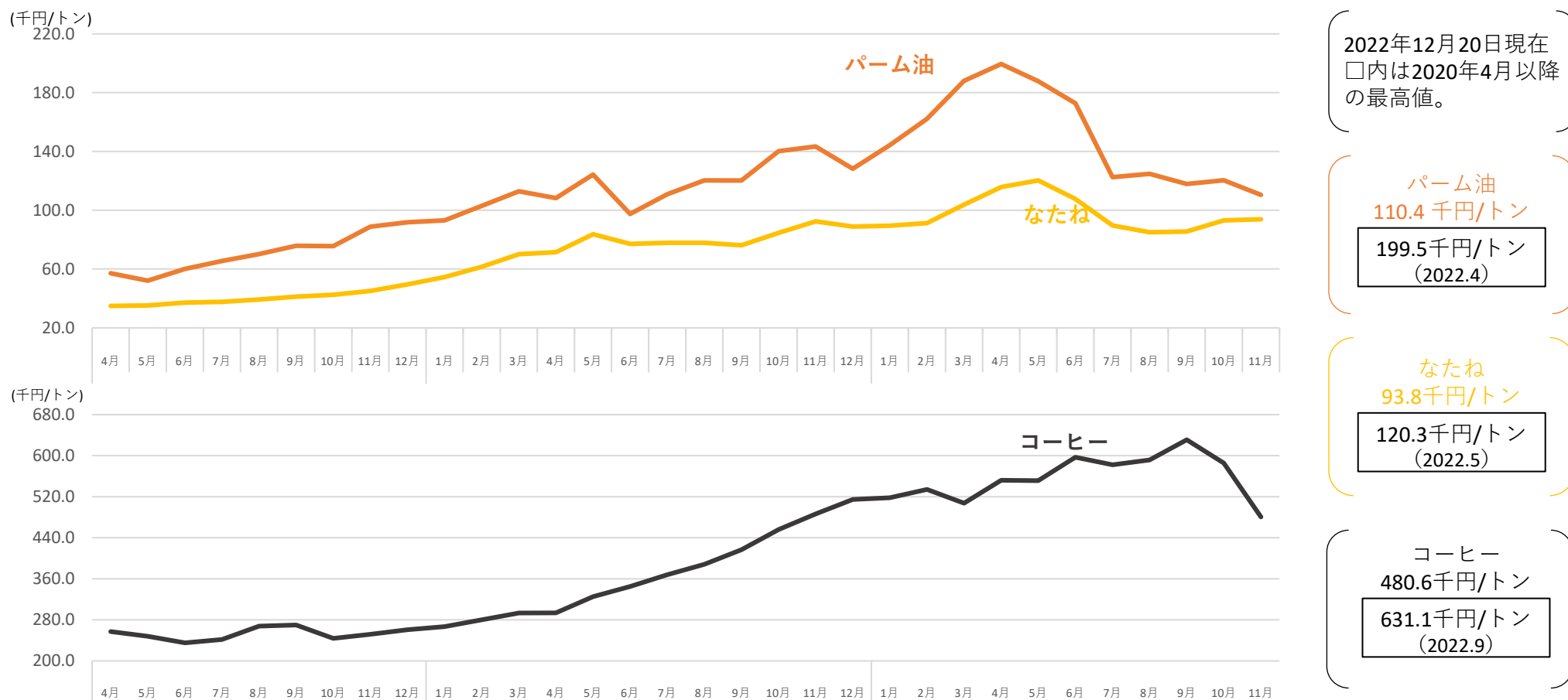
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（５月２３日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

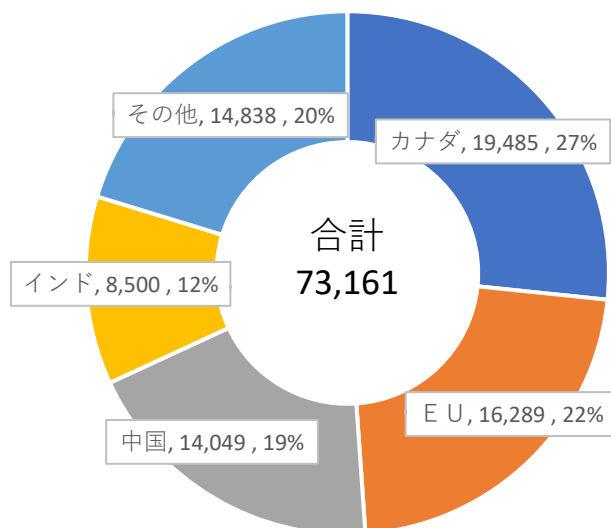


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

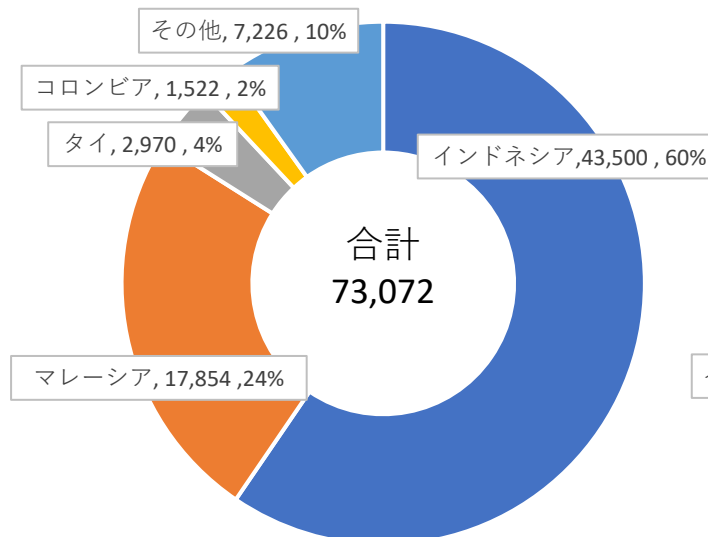
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



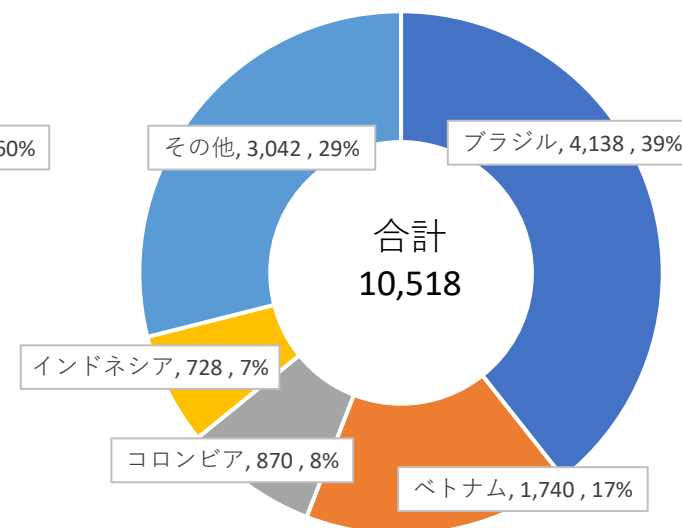
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年11月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.5～162.7（前年同月比で－1.3%～35.0%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和4年6月～令和4年11月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.9	111.9	114.4	113.8	113.7	114.2	14.5%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	110.0	113.7	114.9	112.4	112.3	114.2	13.1%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	104.7	104.9	105.1	106.7	108.3	109.1	6.3%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	139.2	145.8	150.4	156.8	160.2	162.7	35.0%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.8	99.9	100.1	103.4	103.6	104.9	5.3%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	125.0	125.2	126.5	127.0	133.7	136.1	21.0%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	104.0	106.2	106.6	113.2	117.1	118.6	23.7%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.3	99.1	99.4	98.7	98.8	98.5	-1.3%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	103.2	103.8	104.2	105.0	106.7	107.9	6.8%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省）
（令和4年6月～令和4年12月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	105.9	109.8	111.1	110.7	110.9	111.3	112.2	0.8%	14.0%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	110.0	111.2	111.2	110.0	110.0	110.6	110.6	0.0%	13.1%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	102.9	103.3	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	0.4%	6.9%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	132.7	139.1	148.3	156.8	160.6	161.2	161.2	0.0%	38.6%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.8	99.8	100.4	101.7	102.5	102.7	102.7	0.0%	5.3%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	118.3	117.2	118.3	116.9	126.2	128.9	128.3	-0.5%	21.5%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	105.0	105.0	104.5	108.0	114.4	115.4	110.9	-3.9%	20.4%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.3	99.0	99.3	98.6	98.6	98.6	98.6	0.0%	-1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年1月号（12月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛価格、今年最高値を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002528.html

（豪州）牛群再構築段階ながらも、と畜頭数が増加傾向の兆し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002529.html

（中国）コロナ禍にあっても牛肉輸入量は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002530.html

◆豚肉

（EU）豚肉供給量の減少は続き、豚肉価格は高値を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002531.html

（ブラジル）22年の豚肉輸出量は4年ぶりに減少傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002532.html

◆鶏肉

（米国）鶏肉供給増で卸売価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002533.html

（ブラジル）22年の鶏肉輸出は単価大幅高の中、堅調に推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002534.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）国内外の旺盛な需要を背景に、バターの卸売価格は高水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002535.html

（EU）主要生産国の生乳出荷量、前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002536.html

（NZ）生乳生産量、引き続き前年割れで推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002537.html

（中国）生乳生産量の増加傾向、乳製品輸入量の減少傾向、ともに続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002538.html

◆飼料穀物

（世界）生産量と消費量の乖離が拡大し、期末在庫は前年度比微減の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002539.html

（世界）米国の生産量は上方修正、世界期末在庫は引き続き1億トンを維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002540.html

（米国）米国生産量は4カ月ぶりに上方修正されるも期末在庫率は引き続き低水準

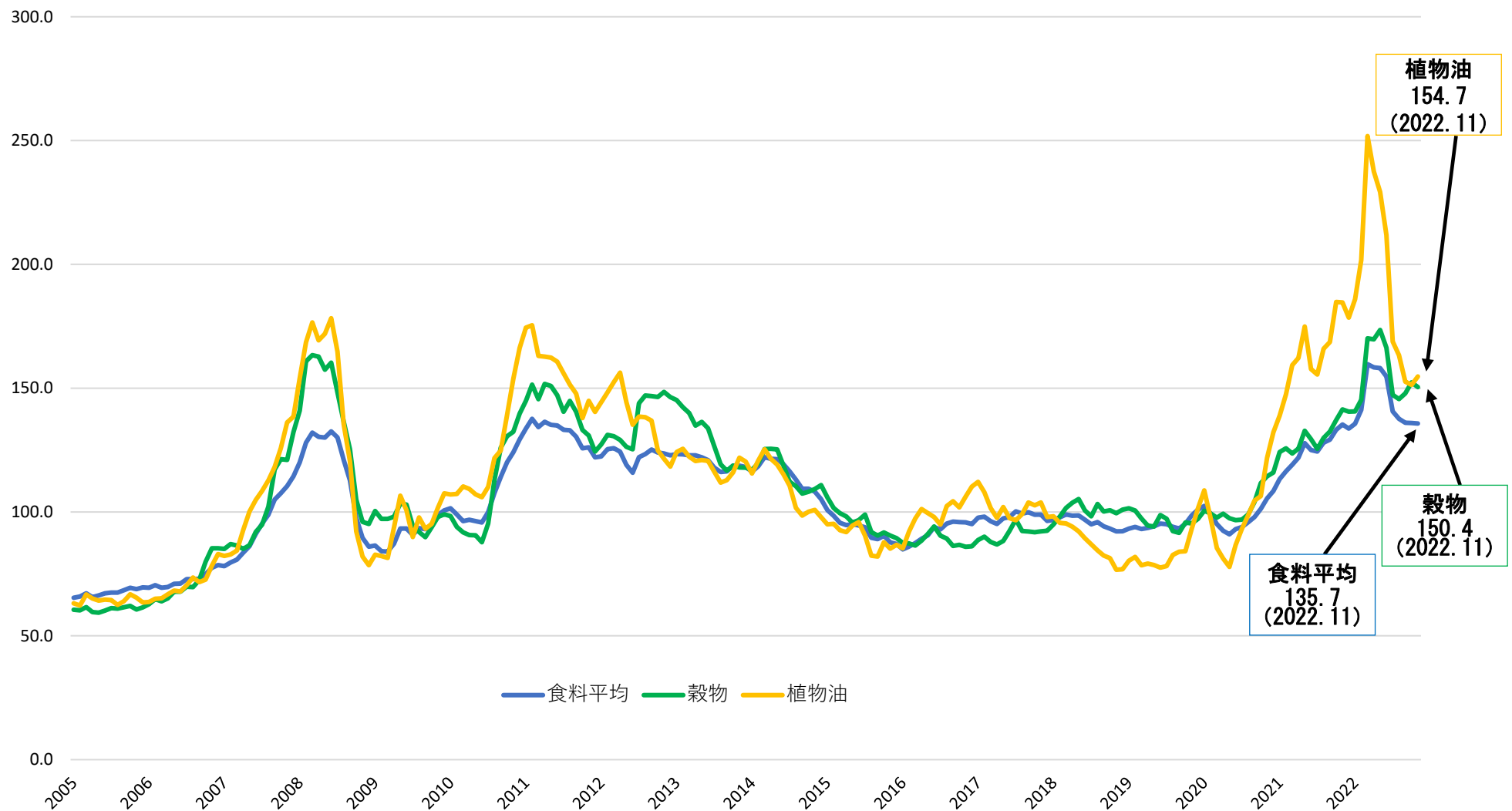
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002541.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002542.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.12)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・豪州等で上方修正されたものの、アルゼンチン、カナダ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

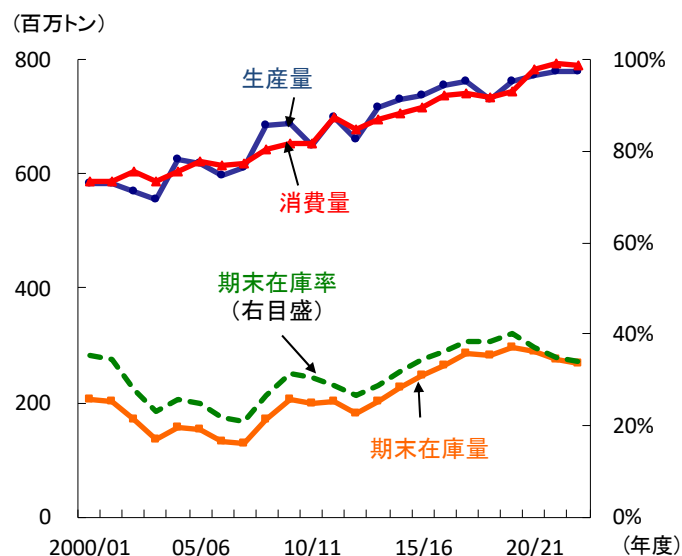
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・韓国、インドネシア等で上方修正されたものの、ウクライナ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・アルゼンチン、インド等で下方修正されたものの、豪州、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022. 12. 9）をもとに農林水産省にて作成

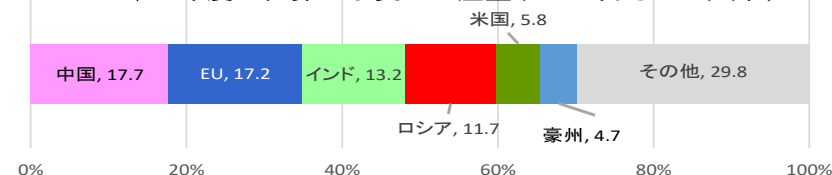
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

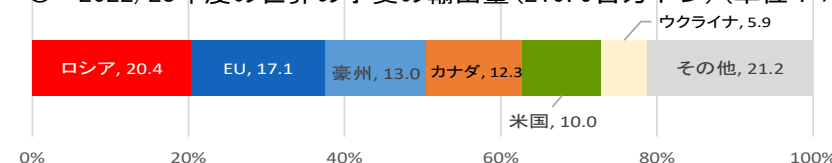
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.6	779.3	780.6	▲ 2.1	0.2
消 費 量	782.4	793.4	789.5	▲ 1.6	▲ 0.5
うち飼料用	157.9	160.9	154.9	▲ 1.5	▲ 3.7
輸 出 量	203.3	202.8	210.9	2.2	4.0
輸 入 量	194.7	198.3	204.3	1.7	3.0
期末在庫量	290.3	276.3	267.3	▲ 0.5	▲ 3.2
期末在庫率	37.1%	34.8%	33.9%	0.0	▲ 1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (9 December 2022)

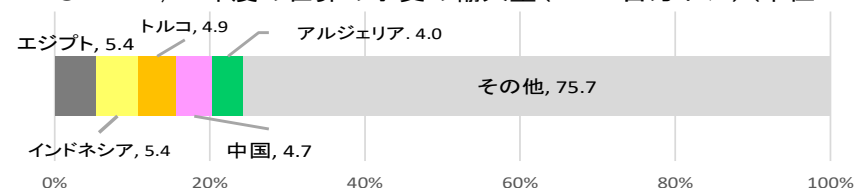
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(780.6百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(210.9百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(204.3百万トン) (単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 輸出価格が高水準で 2022/23 年度の輸出量は低迷

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 44.9 百万トンと前年度に比べ 0.2%増加したものの、2003/04 年度以降で 2021/22 年度に次ぎ少ない。

品種別の生産量は、冬小麦、春小麦、デュラム小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ、30.0 百万トン(前年度比 13.6%減、5 年平均 33.9 百万トン)、13.1 百万トン(同 45.7%増、同 13.7 百万トン)、1.7 百万トン(同 69.9 %増、同 1.6 百万トン)の見込み。冬小麦は、主要生産地の干ばつの影響で前年度に比べ生産量が減少し、一方、春小麦、デュラム小麦は降雨過多による播種遅延があったものの、その後は天候に恵まれたことから、乾燥により減少した前年度から生産量は回復した。

USDA「Wheat Outlook」(2022.12.13)によれば、11 月 27 日時点で 2023/24 年度冬小麦の主要生産 18 州の発芽進捗率は 91%と 5 年平均 (90%) を若干上回る。

12 月 6 日時点で、冬小麦生産地域(カンザス州、オクラホマ州など)の約 73%が干ばつ状況にあり、前年同期の 53%を大幅に上回っている。このため、作柄はわずかに改善したものの、11 月 27 日時点の全米の作柄評価(やや良い～良)の割合は 34%と前年同期の 44%、5 年平均の 49%を下回り、この時期の作柄評価では最低となっている。特に、干ばつに見舞われている主要生産地のカンザス州、オクラホマ州の作柄評価(やや良～良)の割合は、それぞれ 21%、31%と前年同期の 62%、48%を大きく下回っている。なお、シーズン初期の播種と発芽の遅れや、継続的な干ばつにより、これから越冬期に入る冬小麦の生育が影響を受ける可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1 百万トンと 1972/73 年度以降最低となる見込み。同年度 6 月から 10 月の輸出量は、米国産小麦の輸出価格高騰で価格競争力が低下し世界市場シェアが減少したことや、低調な小麦の輸出成約高の継続から、前年度同期を 2 %下回った。価格競争力低下の背景には、減少傾向が続く作付面積や、2 年連続した干ばつの影響による小麦生産量の減少に加え、ドル高、鉄道等輸送コストの上昇がある。

なお、10 月の輸出先国は、メキシコ(17.8%)、フィリピン(15.9%)、イエメン(12.0%)の順。

米国産小麦の輸出価格(FOB)は、12 月 7 日現在で 385 ドル/トンと、干ばつにより生産減が見込まれるアルゼンチン(397 ドル/トン)に比べ安価なものの、他の主要輸出国より高い水準。

小麦一米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消 費 量	30.4	30.4	29.8	-	▲ 2.1
うち飼料用	2.5	2.4	1.4	-	▲ 43.1
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	18.2	15.5	-	▲ 14.7
期末在庫率	40.0%	34.9%	30.6%	-	▲ 4.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(9 December 2022)

図:主要小麦輸出国の輸出価格(FOB)の推移



資料:USDA「Grain:World Markets and Trade」(2022.12.9)

表 米国産小麦の輸出先国別輸出量

(検証高:万トン、シェア%)

2022年11月			2022年1月～11月		
国 名	検証高	シェア	国 名	累積検証高	シェア
メキシコ	19.2	17.8	メキシコ	346.0	18.4
フィリピン	17.2	15.9	フィリピン	224.9	12.0
イエメン	13.0	12.0	日本	195.9	10.4
台湾	11.1	10.3	ナイジェリア	114.0	6.1
エチオピア	7.0	6.5	韓国	107.8	5.7
その他	40.6	37.6	その他	890.3	47.4
合計	108.1	100.0	合計	1,878.8	100.0

注1. 11月の輸出検証高は、11月10、17、24、12月1日の合計値

注2. 2022年累積輸出検証高は、2022年1月6日～12月1日の合計

資料:USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022年12月9日)より作成。

＜ カナダ ＞ 普通小麦、デュラム小麦とも、品質は前年度に比べ良好

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.12.16)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測から 0.9 百万トン下方修正され、33.8 百万トンの見込み。

一方、カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べると、収穫面積が増加し単収も上昇したことから、生産量は 51.7%増加する見込み。

品種別には、普通小麦、デュラム小麦が前月予測から、それぞれ 0.2 百万トン、0.7 百万トン下方修正され、それぞれ 28.4 百万トン、5.4 百万トンとなる見込み。前年度に比べ、普通小麦は、47.4%増加し、デュラム小麦は 79.2%増加する見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、11 月 17 日時点のサンプル調査の結果、普通小麦の格付けは、前年度(2021/22 年度)をわずかに上回り、また 5 年平均も上回っており、サンプルの 93%(前年度同時期 89%)が 1 ～ 2 等に格付けされた。一方、平均タンパク質含有率は、13.9%で前年度(14.7%)を下回っている。また、デュラム小麦の格付けは、前年度に比べ良好で、5 年平均を上回っており、サンプルの 81%(前年度同時期 70%)が 1 ～ 2 等に格付けされた。一方、平均タンパク質含有率は 14.5%と前年度(15.7%)を下回っている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 56.7%増加の 23.7 百万トン。そのうち、普通小麦は、8 月から 10 月までの輸出量が前年度同期の 37%増の 4.8 百万トンになるなどの好調な輸出ペースにより、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され 18.9 百万トンと前年度比 52.3%増加。デュラム小麦は、供給量の減少から、前月予測から 0.2 百万トン下方修正され 4.8 百万トンとなるものの、前年度比では 76.7%増加見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23 年度(2022 年 8 月～2023 年 7 月)の 8 ～ 10 月の輸出量は普通小麦が 466.2 万トン、デュラム小麦は 85.0 万トンの計 551.2 百万トン。輸出先国は、普通小麦が中国(22.7%)、ペルー(10.0%)、日本(9.2%)、デュラム小麦は、イタリア(36.1%)、モロッコ(23.3%)、米国(14.0)の順。普通小麦は特に中国への輸出が増加しており、デュラム小麦は干ばつの影響もありイタリアへの輸出が多くなっている。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.3	33.8 (33.8)	▲ 1.2	51.7
消費量	9.1	10.0	8.6 (8.9)	▲ 0.5	▲ 14.4
うち飼料用	4.2	5.0	3.5 (4.5)	▲ 0.5	▲ 29.9
輸 出 量	26.4	15.1	26.0 (23.7)	-	71.8
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	3.6 (5.0)	▲ 0.6	▲ 3.3
期末在庫率	16.7%	14.6%	10.3% (15.3%)	▲ 1.6	▲ 4.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.19	10.08 (10.08)	0.08	9.7
単収(t/ha)	3.54	2.43	3.35 (3.35)	▲ 0.15	37.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(16 December 2022)

表 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量

〈普通小麦〉

2022年10月			2022年8月～2022年10月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
中国	52.9	26.0	中国	105.7	22.7
ペルー	27.8	13.7	ペルー	46.4	10.0
バングラデシュ	15.8	7.8	日本	42.9	9.2
日本	12.8	6.3	バングラデシュ	42.2	9.1
メキシコ	11.6	5.7	メキシコ	22.2	4.8
その他	82.2	40.5	その他	206.8	44.4
計	203.1	100.0	計	466.2	100.0

〈デュラム小麦〉

2022年10月			2022年8月～2022年10月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
イタリア	16.8	34.0	イタリア	30.7	36.1
モロッコ	11.4	23.1	モロッコ	19.8	23.3
米国	5.6	11.3	米国	11.9	14.0
日本	4.5	9.1	日本	5.1	6.0
トルコ	4.2	8.5	スペイン	4.6	5.4
その他	6.9	14.0	その他	12.9	15.2
計	49.4	100.0	計	85.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のデータ。
注2 普通小麦の品種はNO.1-3Canada Western Red Spring No.1Canada Western Red Winter
No.2Canada Eastern Red Spring No.2Canada Eastern Oter,
デュラムはCanadaWestern Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 生産量は前月予測から上方修正され、史上最高の 36.6 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測から 2.1 百万トン上方修正され、36.6 百万トンと、これまでの史上最高である前年度の 36.4 百万トンを 0.7% 上回る見込み。

生育期当初に良好な生育条件に恵まれたほか、その後、10 月に降雨に恵まれ、単収が過去最高の 2.82 トン/ヘクタール(前月比 7 %増、前年度比 1 %増)となる見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.12 月)によれば、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)とサウスオーストラリア州(SA 州)は、①継続的な低温・湿潤天候により登熟期が確保できたこと、② 降霜の被害が少なかったこと、③晩春に豪州東部に比べ乾燥した天候となり収穫が進んだこと等、春の天候に恵まれた。このため、2022/23 年度の実小麦生産量は、WA 州で 2 %増加の 13.0 百万トン、SA 州では前年度に比べ 45%増の 6.8 百万トンの見込み。一方、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では、中央西部と北部での異常降雨で作付けが大幅に遅れ、一部で作付けができなかったことや、州南部の洪水により、前年度に比べ 28%減少の 9.1 百万トンの見込み。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.12.16)によれば、WA 州の実生産量は史上最高の 13.0 百万トン。品質は、タンパク質含有量は低いが、発芽粒も多くなく、粒が充実し容積重も高く良好である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、生産量の上方修正により、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 27.50 百万トンとなるものの、史上最高となった 2021/22 年度(27.53 百万トン)を下回る見込み。豪州全体では、主にアジアの中心市場(特にインドネシア)向けの高品質小麦の供給量は十分となっているが、東豪州の一部では、収穫期における時期外れの豪雨により品質が低下し、飼料用小麦が増加する見込み。このため、飼料用小麦の価格が低下し、例年よりも東南アジア諸国向け飼料用小麦の輸出量が増加する見込み。なお、豪州産の飼料用小麦の価格は 6 月の 400 ドル/トンから 12 月には 280 ドル/トンに低下している。

豪州統計局によれば、2022 年 10 月の輸出量は 204.3 万トンと、前月(180.7 万トン)に比べ 13.1% 増加。輸出先国は、インドネシア(22.2%)、中国(20.9%)、韓国(14.8%)の順。また、2022 年 1 月から 10 月までの輸出量は前年同期(2,179.9 万トン)を 11.8 %上回る 2438.0 万トン。

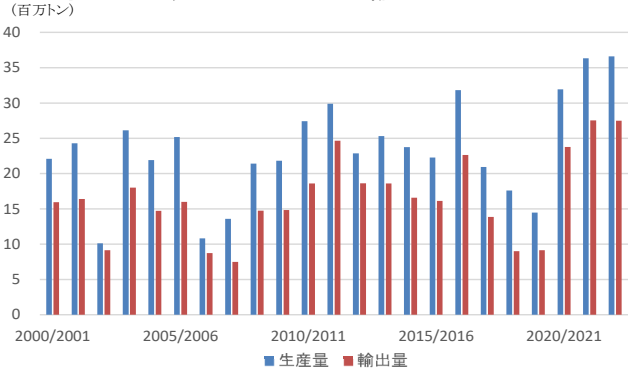
輸出先国は、中国(20.4%)、インドネシア(14.7%)、フィリピン(11.3%)の順。前年(1 月から 12 月)に 294.3 万トンであった中国向け輸出量は、本年 10 月までにすでに 496.9 万トンまで増加している。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	31.9	36.4	36.6 (34.7)	2.1	0.7
消 費 量	8.0	8.5	8.6 (8.6)	-	0.2
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (5.0)	-	-
輸 出 量	23.8	27.5	27.5 (25.7)	1.5	▲ 0.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	▲ 4.8
期末在庫量	3.0	3.5	4.3 (4.0)	0.6	21.4
期末在庫率	9.4%	9.7%	11.8% (11.8%)	1.2	2.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.64	13.04	13.00 (13.1)	▲ 0.10	▲ 0.3
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.82 (2.66)	0.19	1.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図:豪州産小麦の実生産量及び輸出量



資料:USDA「PS&D」(2022. 12. 9)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦輸出量及び輸出先国

2022年10月			2022年1月～10月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	累積輸出量	シェア
インドネシア	45.4	22.2	中国	496.9	20.4
中国	42.6	20.9	インドネシア	359.0	14.7
韓国	30.3	14.8	フィリピン	275.4	11.3
フィリピン	22.2	10.9	ベトナム	253.3	10.4
イエメン	10.6	5.2	韓国	176.0	7.2
その他	53.2	26.0	その他	877.4	36.0
合計	204.3	100.0	合計	2,438.0	100.0

資料:豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27+英国 > 土壌水分は十分となり、2023/24 年度の冬小麦の生育は順調

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.11.25)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 0.3 百万トン下方修正され、前年度に比べ 2.1%減少の 135.2 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、スペイン等で上方修正されたものの、チェコやイタリア等で下方修正されたことから、前月予測に比べ 0.2 百万トン下方修正され、128.0 百万トン。デュラム小麦は、スペイン等で上方修正されたものの、イタリア等で下方修正されたことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、7.2 百万トンの見込み。

また、USDA によれば、EU27 及び英国の生産量は、前月予測からの変更はなく、それぞれ 134.3 百万トン、15.4 百万トンで、EU27 と英国の生産量の合計は 149.7 百万トンの見込み。

2023/24 年度の冬小麦は、欧州の多くの地域で、11 月中旬から 12 月初旬にかけて降雨があり、土壌水分は十分な状態となった。現在は、生育に影響を与える重大な問題や懸念がなく、概ね順調に生育が進んでいる。なお、ドイツやポーランドの一部地域で、気温の低下に伴い、越冬期に入ったとみられる。

フランスアグリメールによれば、12 月 8 日現在、2023/24 年度のフランスの普通小麦は、全体の 58% で分げつ期を迎えており、前年度(50%)に比べると生育がやや早い。デュラム小麦は、発芽進捗率が前年度(76%)を上回る 85%となり、普通小麦と同様に生育がやや早い。また、作柄状況(とても良い～良い)の評価は、普通小麦が前年度同期の 98%とほぼ同程度の 97%、デュラム小麦は前年度同期の 94%を上回る 98%であり、前年度に比べ作柄状況はやや良い。

【貿易情報・その他】USDA によれば、配合飼料原料としての小麦は、大麦やとうもろこしに比べ価格が高いこと、インフレ圧力で消費者が肉や乳製品の消費を抑えたことから、2022/23 年度の EU27 の小麦の飼料用需要は、前月予測に比べ 1.0 百万トン下方修正され、44.5 百万トンとなる見込み。

EU27 の輸出量は、EU 産小麦に価格競争力があり、7 月からの輸出ペースが好調なため、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 36.0 百万トンの見込み。EU の輸出価格(FOB)は、黒海からウクライナ産の輸出が継続されていることから、12 月 7 日現在、前月から 10 ドル/トン低下し 332 ドル/トンとなった。EU 産は、主要輸出 6 か国の中でロシアに次ぎ価格競争力がある。

欧州委員会によれば、2022/23 年度(2022 年 7 月から 2023 年 6 月)のうち、2022 年 9 月の輸出量は、普通小麦が 297.1 万トン(前年度同月 411.0 万トン)、デュラム小麦が 2.2 万トン(同 6.3 万トン)。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	136.3	152.2	149.7 (149.3)	-	▲ 1.6	
消 費 量	118.2	123.7	124.1 (123.6)	▲ 1.0	0.3	
うち飼料用	48.5	52.4	52.3 (51.2)	▲ 1.0	▲ 0.2	
輸 出 量	30.2	32.8	37.3 (35.6)	1.0	13.9	
輸 入 量	8.6	7.2	8.8 (8.3)	1.0	21.5	
期末在庫量	12.1	15.2	12.3 (15.7)	0.9	▲ 18.8	
期末在庫率	8.2%	9.7%	7.6% (9.9%)	▲ 0.1	▲ 2.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	22.97	24.26	24.25 (25.91)	▲ 1.80	▲ 0.0	
単収(t/ha)	5.94	6.27	6.17 (5.76)	-	▲ 1.6	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)
表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

表 EU27 の小麦輸出量及び輸出先国

<普通小麦>

2022年9月			2022年7月～2022年9月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
イラン	40.2	13.5	アルジェリア	141.6	14.1
ナイジェリア	31.9	10.7	モロッコ	122.7	12.3
エジプト	30.2	10.2	エジプト	83.8	8.4
モロッコ	26.9	9.1	ナイジェリア	73.8	7.4
アルジェリア	19.8	6.7	パキスタン	49.0	4.9
中国	15.4	5.2	南アフリカ	47.9	4.8
その他	132.7	44.7	その他	482.5	48.2
計	297.1	100.0	計	1001.2	100.0

<デュラム小麦>

2022年9月			2022年7月～2022年9月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
コートジボワール	0.5	21.7	チュニジア	4.1	26.6
サウジアラビア	0.4	16.5	アルジェリア	3.1	20.6
マリ	0.2	11.1	リビア	2.2	14.4
スイス	0.2	10.0	コートジボワール	1.3	8.8
モロッコ	0.2	9.7	サウジアラビア	0.7	4.6
トルコ	0.1	6.6	モリタニア	0.5	3.5
その他	0.5	24.4	その他	3.3	21.5
計	2.2	100.0	計	15.3	100.0

資料：EU 委員会 Cereals export and imports(2022.11.21)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞10 月の小麦輸入は、カナダ、米国からの輸入シェアが大幅に増加

【生育・生産状況】中国国家统计局「2022 年糧食生産量データ」(2022.12.12)によれば、2022 年、中央政府は小麦の最低購入価格の引上げや、補助金の交付により生産者の生産意欲を高めた結果、2022 年の小麦播種面積は前年並みの 23.53 百万ヘクタールとなった。一方、単収が 5.86 トン/ヘクタールと前年に比べ 0.8%増加したことから、生産量は 137.7 百万トンと、前年度に比べ 0.6%増加し、史上最高となった。なお、中国糧油情報センター「食用穀物市場需給状況月報」(2022.12.5)によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 1.1%増加の 138.4 百万トン(史上最高)の見込み。作期別の生産量は、冬小麦が 131.9 百万トン(対前年度 0.4%増)、春小麦が 6.5 百万トン(同 17.7%増)の見込み。

同情報センターによれば、2023/24 年度の冬小麦の生育状況は、播種以降、北部の冬小麦産地のほとんどの地域で、適度な気温と降水量に恵まれ、土壌水分含有量が十分となり、生長は順調だった。

中央气象台によると、12 月 1 日現在、新疆北部、甘肅中東部の一部を除いて、北部の冬小麦産地のほとんどは三葉期から分げつ期に入っている。また、冬小麦の作柄は、前年度同期に比べ 64.4%が良好で、32.0%が前年同期並み、3.6%が前年同期に比べ低下している。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6 百万トン)から 18.4%減少の 7.8 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022年10月の輸入量は、9 月の36.4万トンから大幅に増加し、前年度同期(47.8万トン)を258.8%上回る123.7万トン。輸入先国は豪州、カナダ、米国の順で、前月に輸入量の85.3%を占めていた豪州のシェアが36.8%(45.5万トン)に減少し、カナダ、米国のシェアがそれぞれ29.8%、27.2%に増加した。米国産の輸入量は、2022年 1 月から 9 月まで約 4 千トンであったが、10月は33.7万トンに大幅増加。6 月以降実績のなかったフランス産も 7.6 万トンとなった。

現地情報会社によれば、カナダ産はカナダ産新穀小麦の品質向上から、米国産は輸入価格の低下や、一部の小麦粉加工業者に米国産小麦に対する一定の需要があったことから、輸入が増加した。

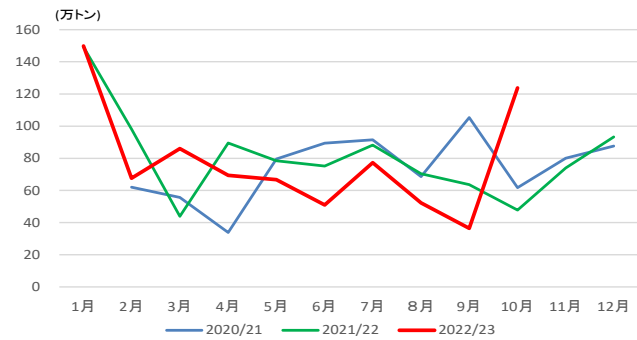
農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 10 月号」によれば、10 月は、市場への小麦供給量が増加したものの、一方で季節的要因(麺類等の需要が増加)により小麦粉市場の消費が回復した。このため、今後の国内小麦価格は、高止まりしながら上下するとみられている。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()	は IGC		
生 産 量	134.3	137.0	138.0	(138.0)	-	0.8
消 費 量	150.0	148.0	144.0	(139.6)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0	(25.0)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9	(1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5	(8.2)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.4	(138.5)	-	1.8
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.6%	(98.5%)	-	4.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.60	(23.6)	-	0.1
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.85	(5.84)	-	0.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図：中国の月別小麦輸入量の推移



資料：中国海関統計(2022. 11. 20)をもとに農林水産省で作成

表：中国の小麦輸入量と輸入先国

2022年10月			2022年1月～2022年10月			2021年1月～2021年10月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	45.5	36.8	豪州	497.2	63.7	米国	257.9	32.1
カナダ	36.9	29.8	フランス	152.1	19.5	カナダ	251.4	31.2
米国	33.7	27.2	カナダ	95.2	12.2	豪州	194.6	24.2
フランス	7.6	6.1	米国	34.1	4.4	フランス	71.3	8.9
-	-	-	カザフスタン	1.7	0.2	カザフスタン	18.0	2.2
-	-	-	ロシア	0.2	0.0	ウズベキスタン	6.6	0.8
-	-	-	-	-	-	ロシア	4.7	0.6
その他	-	-	その他	-	-	その他	0.0	0.0
計	123.7	100.0	計	780.5	100.0	計	804.5	100.0

資料：中国海関統計(2022. 11. 20)をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 輸出が好調となり 10 月、11 月は前年同月を上回る輸出量

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく 91.0 百万トンと、前年度に比べ 21.1%増加し、史上最高となる見込み。

作期別の生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 68.0 百万トン、23.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、生産量は冬小麦が 30.3%増、春小麦が 0.2%増となった。

ロシア農業省の速報値によれば、12 月 9 日時点の収穫進捗率は 99.2%で 29.5 百万ヘクタールが収穫済みとなり、重量調整前の収穫量は 105.5 百万トン(前年度同時期 33.6%増)となった。

一方、同省によれば、2023/24 年度の冬穀物の播種済み面積は、12 月 9 日時点で、対前年度同期比 3.8%減の 17.72 百万ヘクタール。中央連邦管区の黒土地帯で、秋の長雨により冬穀物の播種作業が遅延し播種計画を下回った。来年、未播種となった圃場では春穀物が播種されるとみられる。

現地情報会社によれば、ロシア・ヨーロッパ部の 2023/24 年度の冬小麦の生育段階は、発芽から分げつ期で、同部北部地域では越冬期に入った。また、同部南部地域では、一部で土壌水分不足が懸念されているものの、全体の作柄は良好から並となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、価格競争力があることから、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度に比べ 30.3%増加の 43.0 百万トン。

ロシア産小麦輸出価格(FOB)は、12 月 7 日時点で、潤沢な供給量も堅調な需要から前月の 320 ドル/トンから 4 ドルの下落にとどまったが、主要輸出国(6 か国)では最低の 316 ドル/トン(輸出税含む)。

現地情報会社によれば、11 月の輸出量は 473.9 百万トンで前年度同月(281.5 万トン)を 68.3%上回った。2022/23 年度に入った当初、輸出ペースは比較的低調であったものの、価格競争力が高いことから輸出量は増加し、2022/23 年度のうち 2022 年 7 月から同年 11 月の輸出量は、1,942.2 万トンに達し、過去 3 年の同時期平均(1,850.8 万トン)を 4.9%上回っている。

2022 年 7 月から同年 11 月の輸出先国は、トルコ(17.6%)、エジプト(16.6%)、イラン(8.1%)の順。

ロシア穀物同盟によれば、2022/23 年度上半期は、伝統的な輸出先国のうちトルコ、イラン向けが減少の一方で、新規輸出国として、アルジェリア、パキスタン、サウジアラビア向けが増加している。

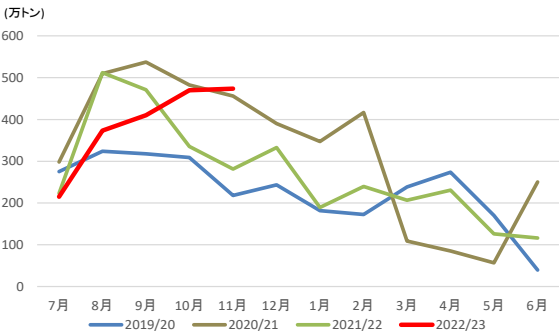
なお、ロシア農業省によれば、2023 年 2 月 15 日から同年 6 月 30 日に計画されている穀物輸出枠は、穀物全体(小麦を含む)で 2,550 万トンの予定だが、輸出需要の状況により増枠も検討されている。

小麦一口ロシア (主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	85.4	75.2	91.0 (95.4)	-	21.1	
消 費 量	42.5	42.8	45.0 (45.8)	-	5.3	
うち飼料用	19.0	19.5	21.0 (20.5)	-	7.7	
輸 出 量	39.1	33.0	43.0 (41.1)	1.0	30.3	
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-	
期末在庫量	11.4	11.1	14.4 (20.0)	▲ 1.0	29.8	
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.4% (23.0%)	▲ 1.3	1.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (28.7)	-	3.9	
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (3.32)	-	16.5	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図: ロシア産小麦の月別輸出量の推移



資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表: ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2022年11月)				2022/23年度 (2022年7月～2022年11月)				2021/22年度 (2021年7月～2021年11月)			
国 名	輸出量	シェア		国 名	輸出量	シェア		国 名	輸出量	シェア	
トルコ	87.6	18.5	トルコ	341.2	17.6	トルコ	391.8	21.5			
エジプト	66.3	14.0	エジプト	321.6	16.6	イラン	351.9	19.3			
アルジェリア	47.9	10.1	イラン	157.2	8.1	エジプト	276.8	15.2			
カザフスタン	26.8	5.6	カザフスタン	130.6	6.7	カザフスタン	101.5	5.6			
リビア	24.0	5.1	サウジアラビア	125.2	6.4	ナイジェリア	67.0	3.7			
スーダン	21.0	4.4	アルジェリア	87.8	4.5	アゼルバイジャン	61.2	3.4			
バングラデシュ	20.9	4.4	バングラデシュ	67.5	3.5	サウジアラビア	59.4	3.3			
その他	179.3	37.8	その他	711.1	36.6	その他	513.7	28.2			
計	473.9	100.0	計	1,942.2	100.0	計	1,823.3	100.0			

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞輸出量は上方修正も、前年度に比べ 33.7%減少の 12.5 百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、20.5百万トンの見込み。ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積が29.1%、単収が12.4%減少したことから、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ37.9%減少、過去5年平均に比べ26.6%減少する見込み。

ウクライナ農業政策食料省(2022.12.9)によれば、2022/23年度の収穫は終了し、収穫面積は4.71百万ヘクタール(前年度7.07百万ヘクタールに比べ33.4%減)、単収は4.12トン/ヘクタール(同4.62トン/ヘクタール、0.5トン/ヘクタール減)となり、収穫量は19.4百万トン(同32.4百万トン、40.1%減)。

また、同省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は、11月28日時点で3.80百万ヘクタール。播種進捗率は95%となった。なお、播種予定面積は前年度を40.4%下回る3.99百万ヘクタール。

生育段階は、概ね分けつ期となっているが、一部では越冬期に入っている。また、オデーサ州など南部では依然として土壌水分不足の地域があるものの、作柄は概ね良好。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測から1.5百万トン上方修正されたものの、前年度に比べ33.7%減少の12.5百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度の7月～11月のウクライナの小麦の輸出量は前年度比54%減の676.5万トン(このうち「黒海穀物イニシアチブ」による輸出量は358.8万トン)。輸出先国は、トルコ(21.1%)、ルーマニア(17.2%)、スペイン(11.9%)。なお、トルコは前年度比12%増加、ルーマニアは前年度の輸出実績はなく、スペインは前年度の10万トンから80万トンに急増した。他方、従来の主要輸出先であったエジプトやインドネシアは、それぞれ前年度比90%減、94%減となった。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、11月30日現在、合意に基づく8月から11月までの黒海港湾からの小麦輸出量は358.8万トンで、輸出先国は、スペイン(23.7%)、トルコ(17.3%)、バングラデシュ(9.0%)の順。11月の穀物イニシアチブ枠内での小麦輸送量は81万トン。

現地情報会社によれば、「黒海穀物イニシアチブ」による輸出量は8月の輸送再開から順調に増加してきたが、11月は共同調整センターによる船舶検査が検査員不足等により減少したとみられる。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、再度120日延長され、2023年3月19日までとされている。

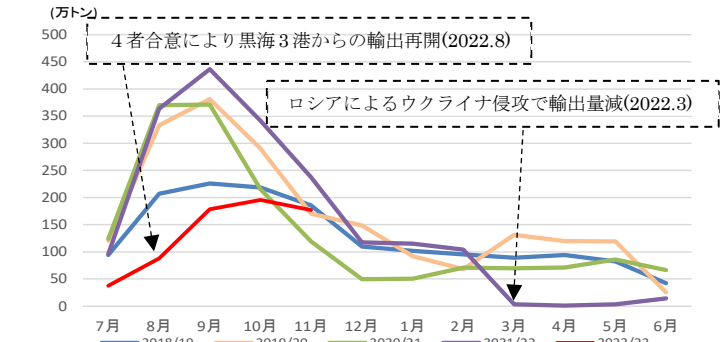
小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	25.4	33.0	20.5 (21.5)	-	▲ 37.9	
消 費 量	8.7	10.0	9.7 (8.5)	▲ 1.0	▲ 3.0	
うち飼料用	2.6	4.0	4.5 (2.9)	▲ 1.0	12.5	
輸 出 量	16.9	18.8	12.5 (13.0)	1.5	▲ 33.7	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6	
期末在庫量	1.5	5.8	4.2 (6.0)	▲ 0.5	▲ 27.5	
期末在庫率	5.9%	20.1%	19.0% (27.7%)	▲ 2.7	▲ 1.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.25 (5.5)	-	▲ 29.1	
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.90 (3.90)	-	▲ 12.4	

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図：ウクライナ産小麦の月別輸出量の推移



資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2022年11月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年11月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	33.7	19.1	トルコ	142.6	21.1
ルーマニア	24.3	13.8	ルーマニア	116.3	17.2
ポーランド	18.4	10.4	スペイン	80.8	11.9
イタリア	16.0	9.1	ポーランド	43.9	6.5
スペイン	11.6	6.6	イタリア	34.5	5.1
バングラデシュ	7.7	4.4	バングラデシュ	28.9	4.3
ハンガリー	6.5	3.7	レバノン	22.9	3.4
その他	58.5	33.1	その他	206.6	30.5
計	176.7	100.0	計	676.5	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ、ロシア等で下方修正され、前月から下方修正された。

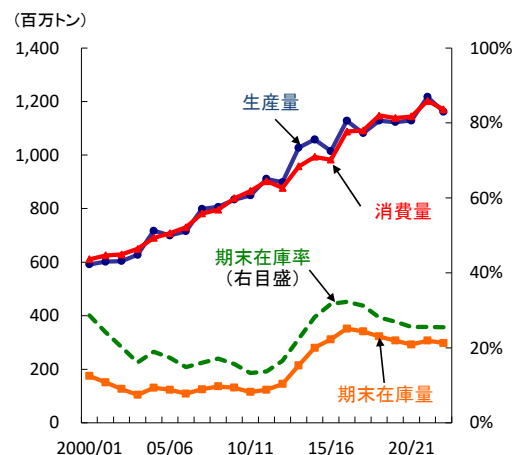
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・EU で上方修正も、ウクライナ、ベトナム等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナで上方修正も、米国、ロシア等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2022.12.9)をもとに農林水産省にて作成

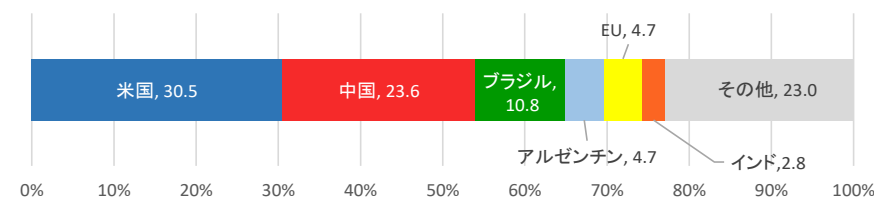
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

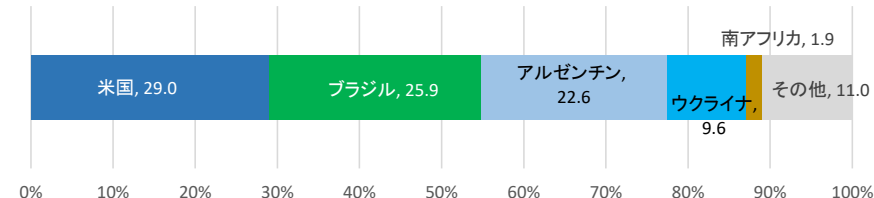
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.2	1,216.9	1,161.9	▲ 6.5	▲ 4.5
消費量	1,144.1	1,202.3	1,170.6	▲ 4.8	▲ 2.6
うち飼料用	724.0	751.3	735.3	▲ 5.1	▲ 2.1
輸 出 量	182.7	202.5	181.6	▲ 1.1	▲ 10.3
輸 入 量	184.9	183.9	176.4	▲ 1.2	▲ 4.1
期末在庫量	292.5	307.1	298.4	▲ 2.4	▲ 2.8
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.5%	▲ 0.1	▲ 0.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 December 2022)

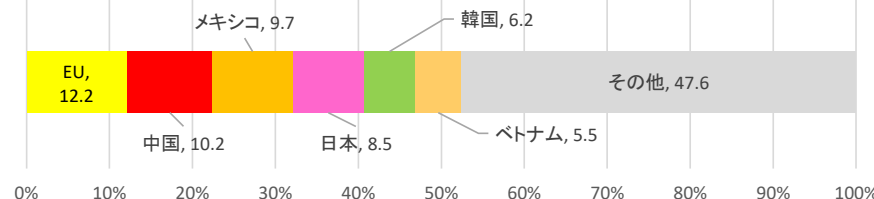
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,161.9 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(181.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(176.4 百万トン) (単位：%)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より7.6%減の353.8百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2015/16年度以来の低水準の見込み。

11月末時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少に伴い、前年度より3.7%減の305.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、南米等の他の輸出国との競争、ミシシッピ川水位低下による輸出価格の高騰などから、輸出が低調なことから前月予測から1.9百万トン下方修正され、前年度より16.0%減の52.7百万トンの見込み。これは、2019/20年度(45.2百万トン)以来の低水準である。

なお、USDA「Feed Outlook」(2022.12.13)によれば、2022年9～11月の輸出量は、前年度同期比48%減少、過去5年平均比32%減少となる19.0百万トン。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～12月1日)は、48.1百万トンであり、内訳は中国(14.4百万トン)、メキシコ(13.1百万トン)、日本(8.6百万トン)、コロンビア(2.8百万トン)の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、輸出量の下方修正により前月予測から1.9百万トン上方修正されたものの、生産量の減少から前年度より8.7%減の31.9百万トンの見込み。

期末在庫率は8.9%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

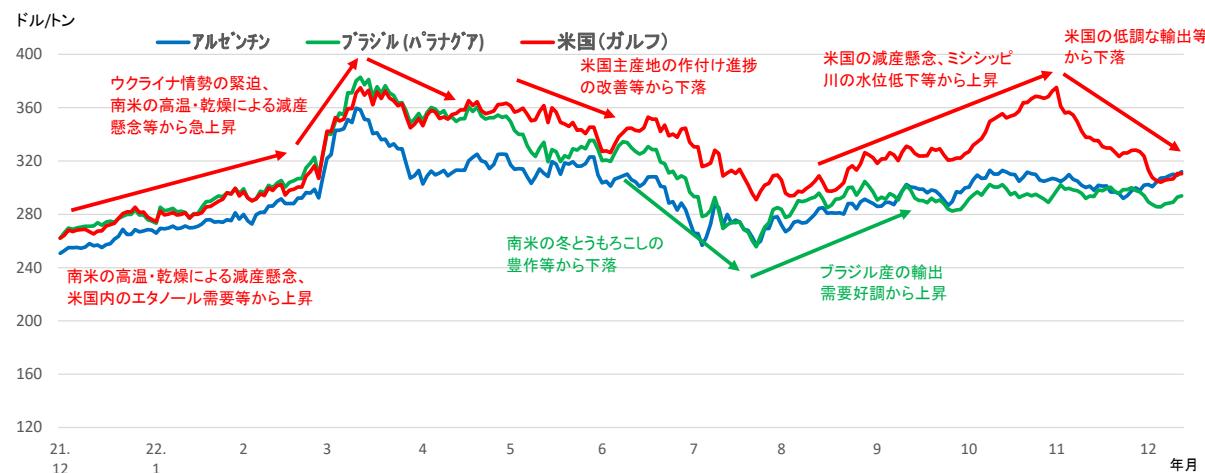
とうもろこし－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	353.8	－	▲ 7.6
消 費 量	306.7	317.1	305.5	－	▲ 3.7
うち飼料用	142.4	145.2	134.6	－	▲ 7.3
エタノール用等	127.7	135.3	134.0	－	▲ 1.0
輸 出 量	69.8	62.8	52.7	▲ 1.9	▲ 16.0
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	－	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	31.9	1.9	▲ 8.7
期末在庫率	8.3%	9.2%	8.9%	0.6	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.72	－	▲ 5.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.82	－	▲ 2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より8.6%増の126.0百万トンで史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.12.8)によれば、初期生育期の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、単収の増加により、前年度比8.8%増の27.2百万トンの見込み。一方、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.9%増の98.6百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比11.2%増の125.8百万トンで史上最高の見込み。(P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照)。

12月上旬から中旬にかけて主要産地の大半で生育に必要な降雨があり、土壌水分が補給されたものの、ブラジル南西部では高温・乾燥傾向となっている。南部のパラナ州で12月12日現在、夏とうもろこしの作付けは終了し、82%の作柄は良好。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で12月15日現在、夏とうもろこしの作付進捗率は89%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より5.5%増の77.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より5.6%増の47.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～11月の輸出量は37.2百万トンで、前年同期(17.0百万トン)と比べ2.2倍となっている。内訳は、1位がイラン5.8百万トン、2位が日本4.5百万トン、3位がスペイン4.2百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の中東・EU向け輸出が大幅に増加した。なお、11月の輸出量は6.1百万トンで、前年同月(2.4百万トン)と比べ、2.5倍となっている。11月23日付けで中国向け輸出が開始されたとみられ、11月の輸出量は6.8万トン。2023年以降、輸出が本格化するとみられる。

とうもろこしーブラジル

(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4)

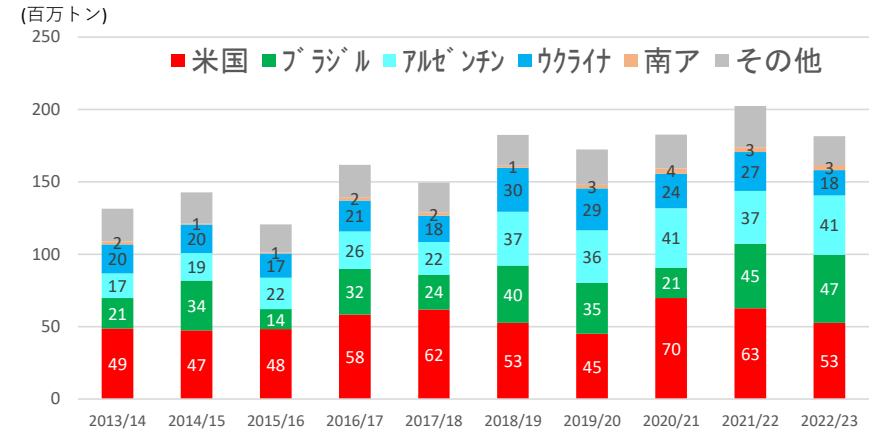
(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	126.0	(123.1)	-	8.6
消 費 量	70.0	73.0	77.0	(77.6)	-	5.5
うち飼料用	59.5	62.0	65.5	(55.5)	-	5.6
輸 出 量	21.0	44.5	47.0	(44.6)	-	5.6
輸 入 量	2.9	2.3	1.3	(0.5)	-	▲ 43.5
期末在庫量	4.2	5.0	8.3	(6.1)	-	66.7
期末在庫率	4.6%	4.2%	6.7%	(5.0%)	-	2.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70	(21.80)	-	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55	(5.65)	-	4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)

IGC「Grain Market Report」(17 November 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.12.9)のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 6.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.12.15）によれば、12 月上旬に産地で降雨があったものの、2022/23 年度の作付進捗率は 43%で、長引く高温・乾燥により過去 5 年平均（58%）より 15 ポイント遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 4.8%減の 14.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 12.3%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～10 月の輸出量は 32.4 百万トンで、前年同期（35.3 百万トン）より 8.3%減。内訳は、1 位がベトナム 4.8 百万トン、2 位が韓国 4.3 百万トン、3 位がペルー 2.8 百万トン。なお、10 月の輸出量は 2.1 百万トンで、ブラジルの冬とうもろこしの不作等により生産・輸出が好調だった前年同月（3.8 百万トン）と比べ、44.2%減。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 %から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。12 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンと設定されている。

アルゼンチンの主要穀物等の輸出規制

2022年12月時点 輸出規制等	輸出税	輸出上限数量（年度別）		その他
		2021/22	2022/23	
とうもろこし	12%	3600万トン	2000万トン	
大豆	最大33%	—	—	為替優遇措置
大豆油	最大33%（12月末まで）	—	—	公式為替レートの165ペソ/ドルに対し11月28日から2022
大豆油かす	最大33%（12月末まで）	—	—	年末まで為替優遇措置（230ペソ/ドル）の再導入
小麦	12%	1250万トン	1000万トン	

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 （見込み）	2022/23（23年3月～24年2月）		
			予測値、（ ）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	52.0	51.5	55.0（57.0）	—	6.8
消 費 量	13.5	14.7	14.0（20.4）	—	▲ 4.8
うち飼料用	9.5	10.8	10.0（15.5）	—	▲ 7.4
輸 出 量	40.9	36.5	41.0（38.3）	—	12.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0（0.4）	—	—
期末在庫量	1.2	1.5	1.5（2.2）	—	—
期末在庫率	2.2%	2.9%	2.7%（3.8%）	—	▲ 0.2
（参考）					
収穫面積（百万ha）	6.55	7.40	7.00（8.00）	—	▲ 5.4
単収（t/ha）	7.94	6.96	7.86（7.13）	—	12.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC「Grain Market Report」(17 November 2022)

写真：北部サンタフェ州のとうもろこしの圃場風景
（12月6日撮影）



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】中国国家统计局「2022 年糧食生産量データ」（2022.12.12）によれば、2022 年の生産量は前年より 1.7%増の 277.2 百万トンで史上最高の見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より 0.5%増の 274.0 百万トンで史上最高の見込み。なお、政府補助金による大豆生産奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積は減少する見込み。

11 月上旬時点で、春とうもろこし、夏とうもろこしの収穫はすでに終了。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より 1.4%増の 295.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より 17.7%減の 18.0 百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022 年 1～10 月の輸入量は 19.0 百万トンで、前年同期比で 27.5%減。内訳は、米国産 13.8 百万トン（72%）、ウクライナ産 4.9 百万トン（26%）。5 月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

なお、11 月 23 日以降、これまでほとんど輸入のなかったブラジル産の輸入を開始した模様。2023 年以降、輸入が本格化するとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 10 月号」によると、10 月の国内流通価格は、2,940 元/トンと前月（2,920 元/トン）からわずかに上昇。主な要因は、10 月は収穫期を迎えているが、本年は作付けコストが大幅に上昇し、農家は売り惜しみ心理が高まっている中、とうもろこし加工・飼料消費が季節的な需要期に入ったためである。一方、10 月の輸入価格は、米国と EU の生産量の下方修正を受けて、3,420 元/トンと前月（3,060 元/トン）から大幅に上昇。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要。

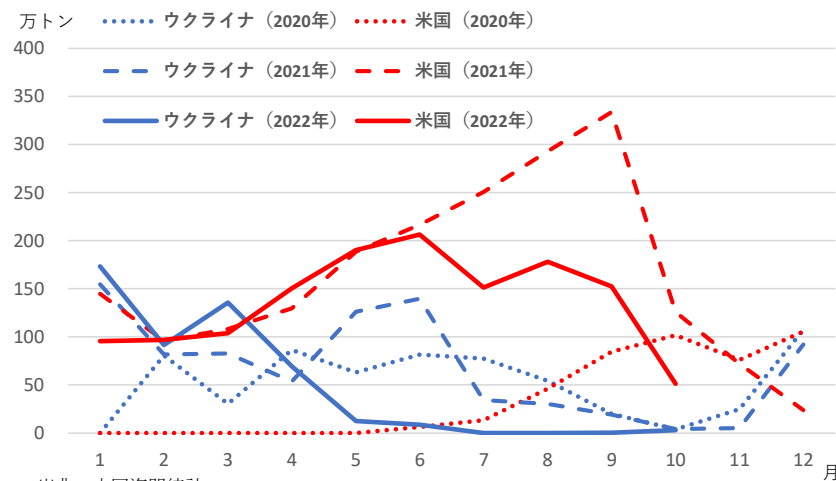
とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	274.0 (275.3)	-	0.5	
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (307.5)	-	1.4	
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (205.2)	-	2.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	21.9	18.0 (19.0)	-	▲ 17.7	
期末在庫量	205.7	209.1	206.1 (175.0)	-	▲ 1.4	
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.9% (56.9%)	-	▲ 2.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (43.00)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.37 (6.40)	-	1.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

＜ ウクライナ ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 35%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、収穫期の 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアの侵攻に起因する影響により、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、冬場に圃場に放置されることなどから前月予測から 4.5 百万トン下方修正され、収穫面積及び単収の減少から、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、12 月 16 日時点で、収穫済面積は 2.9 百万ヘクタール、収穫量 18.4 百万トン、収穫進捗率は 70%となっている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度より 29.4%減の 7.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正にも関わらず、減産となった EU 向け輸出の増加が予想されることから前月予測から 2.0 百万トン上方修正された。しかし、前年度より 35.1%減の 17.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、10 月～11 月の輸出量は、472 万トンで、前年度同期（469 万トン）に比べ 0.7%増。輸出先国は、ルーマニア、中国、ハンガリー、スペイン等となっている。なお、この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等の輸出も含まれる。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された 8 月 1 日から 11 月 30 日までの黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 516 万トン、輸出先国は、スペイン（104 万トン）、イタリア（71 万トン）、中国（69 万トン）、トルコ（60 万トン）等である。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、再度 120 日延長され、2023 年 3 月 19 日までとされている。

また、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から 3.0 百万トン下方修正されたものの、前年度より 35.4%増の 6.9 百万トンの見込みで、在庫が積み上がっている。

とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

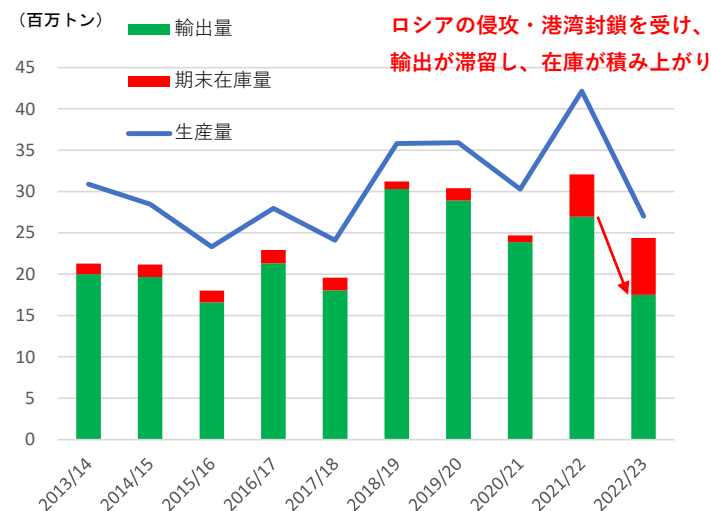
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	27.0	(29.9)	▲ 4.5	▲ 35.9
消 費 量	7.1	10.9	7.7	(10.9)	▲ 3.0	▲ 29.4
うち飼料用	5.9	9.7	6.5	(5.5)	▲ 3.0	▲ 33.0
輸 出 量	23.9	27.0	17.5	(17.0)	2.0	▲ 35.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	5.1	6.9	(8.9)	▲ 3.0	35.4
期末在庫率	2.7%	13.4%	27.3%	(32.1%)	▲ 10.3	13.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00	(4.59)	▲ 0.50	▲ 27.1
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75	(6.52)	▲ 0.25	▲ 12.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022. 12. 9) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↓ 2022/23 年度 前月比 ↓

・ブラジル、EU、韓国等で下方修正され、前月から下方修正された。

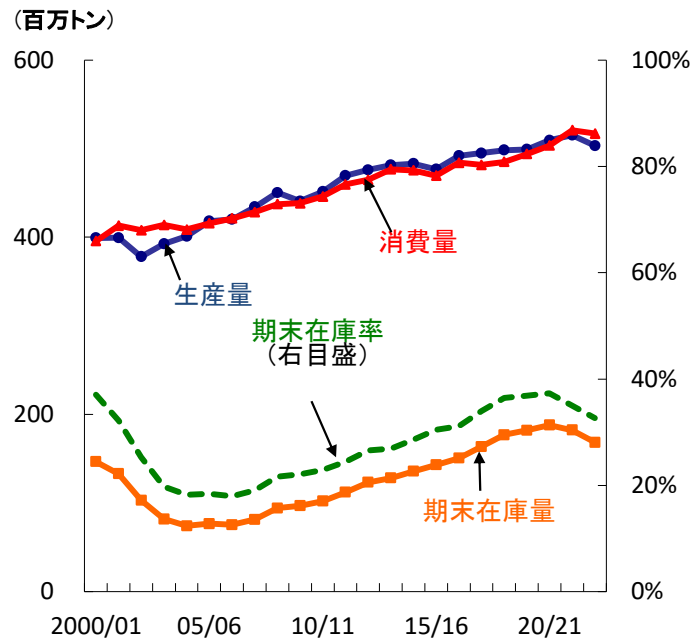
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド、タイ、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・米国、EU 等で下方修正されたものの、インド、タイ、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.12.9）をもとに農林水産省にて作成

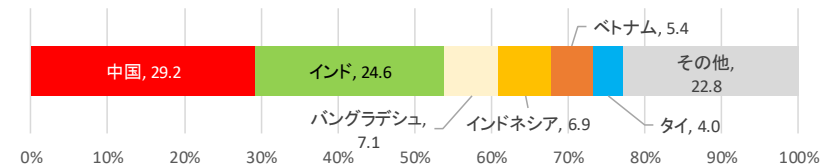
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

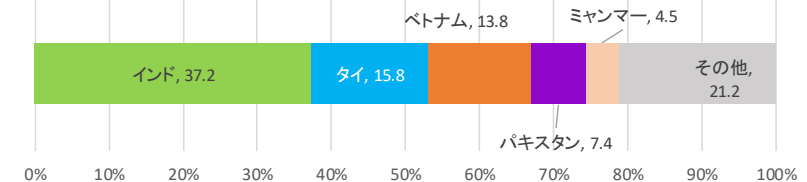
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	515.1	503.3	▲ 0.4	▲ 2.3
消 費 量	503.5	520.8	516.9	▲ 0.9	▲ 0.7
輸 出 量	50.9	56.9	53.7	0.9	▲ 5.7
輸 入 量	46.4	54.5	52.4	1.0	▲ 3.7
期末在庫量	188.0	182.3	168.6	▲ 0.4	▲ 7.5
期末在庫率	37.3%	35.0%	32.6%	▲ 0.0	▲ 2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 December 2022）

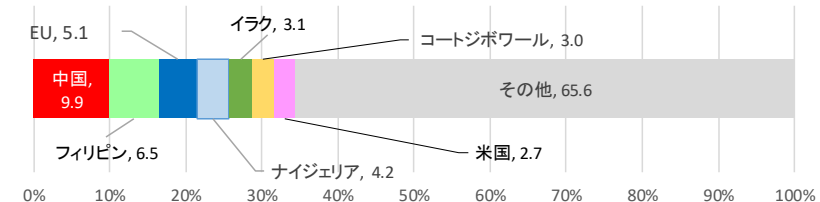
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(503.3百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(53.7百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(52.4百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量減少により長粒種の価格が高止まり。輸出量は減少

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少により、対前年度比 14.3%減の 5.2 百万トンと、1993/94年度以来の低水準となる見込み。収穫面積は、対前年度比で 12.9%減少し、1983/84年度以来の低水準。このうちミシシッピ川下流域（長粒種の主産地）では、農業資材の高騰、大豆やとうもろこしの収益性の方が高いこと、作付け期の降雨過多による作付け減少により、主産地のアーカンソー州等で収穫面積が減少する見通し。また、中・短粒種の国内生産の 75%を占めるカリフォルニア州では、厳しい干ばつの長期化による灌漑用水不足や取水制限により、2年連続で収穫面積が減少し、1958/59年度以来の低水準となる見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少による供給量減少から、対前年度比 6.2%減の 4.5 百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 19.2%増の 1.4 百万トンと史上最高の見込み。アジアからの香り米が輸入の大半を占めているが、9月に引き続き10月にも、主に加工用の碎米がブラジルから輸入された。国内消費量に占める輸入の割合は 30%以上と、史上最高となる見込み。

2022/23年度の輸出量は、特に長粒種の輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込み等から、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 16.1%減の 2.2 百万トンと、1991/92年度以来の低水準の見込み。

USDA「Rice Outlook」(2022.12.13)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間高止まりしており、12月6日までの週のイラク向け長粒種（2等、碎米4%混入）は 730 ドル/トンと、2008年10月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている（P.20の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また、中粒種の価格は、地中海向けカリフォルニア米（1等、碎米4%混入）が 1,625 ドル/トンと、引き続き過去最高となった。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

(単位：百万精米トン)

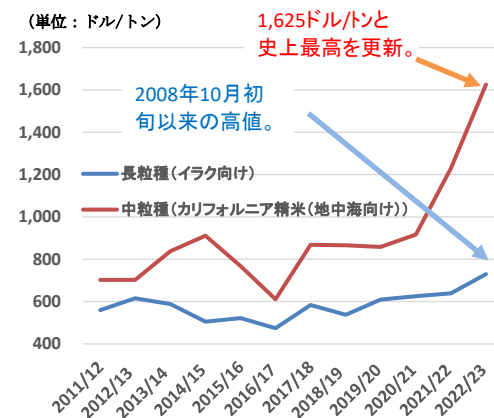
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.2	-	▲ 14.3
消費量	4.9	4.8	4.5	-	▲ 6.2
輸出量	3.0	2.6	2.2	▲ 0.1	▲ 16.1
輸入量	1.1	1.2	1.4	-	19.2
期末在庫量	1.4	1.3	1.2	0.1	▲ 4.0
期末在庫率	17.8%	17.0%	18.1%	1.1	1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.46	-	▲ 2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)

図：米国の長粒種と中粒種の輸出価格の推移



資料：USDA「Rice Outlook」(2022.12.13)より。価格は年度内の平均価格。

なお、2022/23年度は2022年12月の価格。

< インド > ラビ米の作付けは前年度よりも速いペースで進捗

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、モンスーン期の降雨不足による作付け減少により、対前年度比 4.8%減の 124.0 百万トンの見込み。

10 月下旬からほぼ全土が乾季に入ったが、南西モンスーン期の降雨が例年より多かったため、土壌水分が良好となり、ラビ米の作付けは前年同時期より速いペースで進んでいる。

インド農業農民福祉省（2022.12.16）によると、ラビ米の作付け済面積は、12 月 16 日時点で 126.4 万ヘクタールと、前年度同期（111.3 万ヘクタール）に比べて 15.1 万ヘクタール増加。過去 5 年平均（2016/17-2020/21 年度）の作付面積に対する進捗率は 27.7%。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸出量の上方修正から、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、史上最高となった対前年度より 2.5%減の 108.5 百万トンとなる見込み。なお、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム向けにコメを放出していることもあり、依然として史上 2 番目の消費量となる見込み。

2022/23 年度の輸出量は、サブサハラ・アフリカ向け輸出が予想外に増加したことから、前月予測から 0.5 百万トン上方修正されたものの、生産量減少により、対前年度比 9.1%減の 20.0 百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を防止する観点から、9 月 9 日に輸出規制（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））を発動。ただし、依然として世界の輸出量の 37%を占め、世界第 1 位の輸出国となる見込み。

2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 13.2%減の 29.5 百万トンの見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」（2022.12.9）によれば、インド産米（碎米 5 %混入）の 12 月 6 日までの週の価格は、400 ドル/トンと前月から 15 ドル/トン上昇したものの、依然アジア主要輸出国の中で最低価格水準となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

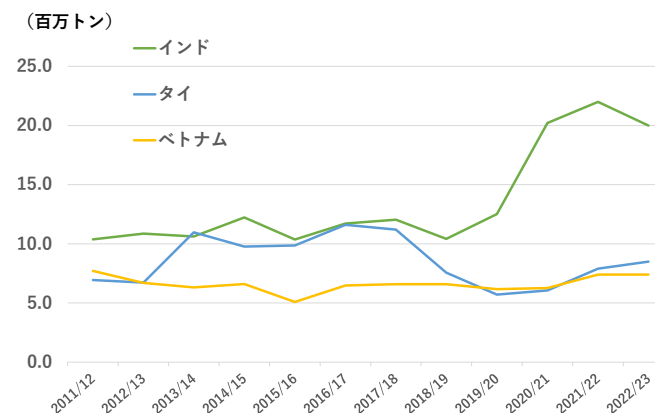
（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	124.4	130.3	124.0 (123.8)	-	▲ 4.8
消 費 量	101.1	111.3	108.5 (109.0)	▲ 0.5	▲ 2.5
輸 出 量	20.2	22.0	20.0 (16.5)	0.5	▲ 9.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	37.0	34.0	29.5 (31.6)	-	▲ 13.2
期末在庫率	30.5%	25.5%	23.0% (25.1%)	-	▲ 2.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	45.77	46.38	45.50 (45.00)	-	▲ 1.9
単収(もみt/ha)	4.08	4.21	4.09 (2.75)	-	▲ 2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)

IGC「Grain Market Report」(17 November 2022)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2022.12.9）をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 収穫は11月末に終了。南部の干ばつ等で前年度より減産

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比1.3%減の147.0百万トンの見込み。

国家糧油情報センター「食用穀物市場需給状況月報」（2022.12.5）によれば、11月末現在、収穫は終了した。

また、中国国家统计局「2022年糧食生産量データ」（2022.12.12）によれば、今年の水稲の播種面積は29.5百万ヘクタールと、対前年比1.6%（47.1万ha）減少した。単収は7.1トン/ヘクタールと、南部の高温干ばつの影響により、対前年比0.5%（0.035トン/ヘクタール）減少した。生産量（もみベース）は208.5百万トンと、対前年比2.0%（4.4百万トン）減少した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比0.9%減の155.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、10月に輸入契約が予想以上に増加したことから、前月予測から0.2百万トン上方修正されたものの、砕米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通し及びインドのコメ輸出規制により、対前年度比12.6%減の5.2百万トンの見込み。中国は、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインド等から輸入してきた。

中国海関統計によれば、2022年1～10月の輸入量は、前年同期の386.9万トンから40.2%増加し、542.4万トンとなった。輸入先はインドが213.3万トンと最も多く、次いでパキスタンが112.2万トンとなっている。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.2百万トン上方修正されたものの、対前年度比4.4%減の108.0百万トンの見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が依然として約6割を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	147.0 (146.3)	-	▲ 1.3
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.4)	-	▲ 0.9
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.2)	-	5.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.2 (3.2)	0.2	▲ 12.6
期末在庫量	116.5	113.0	108.0 (104.2)	0.2	▲ 4.4
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.7% (67.8%)	0.1	▲ 2.6

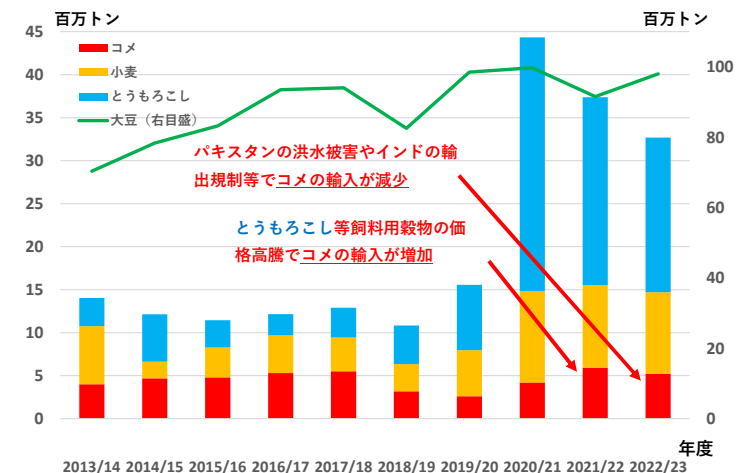
(参考)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)	-	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.00 (4.87)	-	▲ 1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)

IGC「Grain Market Report」(17 November 2022) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.12.9)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、対 2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。なお、2022 年 8 月から 10 月の台風や洪水の被害は限定的であった。

2022/23 年度の実生産量も、前月予測からの変更はなく、収穫面積が拡大すると予測されることから、対前年度比 1.1%増の 20.1 百万トンの見込み。背景には、輸出価格上昇が農家の作付け意欲を刺激していることもあると推測される。なお、タイ全土は乾季に入っているものの、11 月中旬から 12 月上旬にかけて十分な降雨があり、灌漑用水が補充されたため、乾季米の生育に良好な状況になっているとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、競争相手であるインドやパキスタンの輸出の更なる減少から、前月予測から 0.3%上方修正され、イラクやサブサハラ・アフリカへの予想を上回る輸出から、対前年度比 7.6%増の 8.5 百万トンと、2018 年度以来の高水準となり、インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の実輸出量は、10 月にイラクやサブサハラ・アフリカへの予想を上回る輸出があったことから、前月予測から 0.3%上方修正され、対 2020/21 年度比 25.9%増の 7.9 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～10 月の輸出量は、前年同期の 466.3 万トンから 33.1%増加し、620.3 万トンとなった。輸出先はイラクが 131.0 万トン（前年度比 6.2 倍）、南アフリカが 64.2 万トン（前年度比微増）、米国が 54.6 万トン（前年度比 1.3 倍）、中国が 53.1 万トン（前年度比 1.2 倍）。

USDA 「Rice Outlook」(2022.12.13) によれば、12 月 6 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、主としてバツ高により、11 月 8 日までの週の価格から 36 ドル上昇し、454 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。背景として、インドネシアにおいて政府備蓄の不足に対処するため、タイからの輸入を拡大していることもあるとみられる。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)

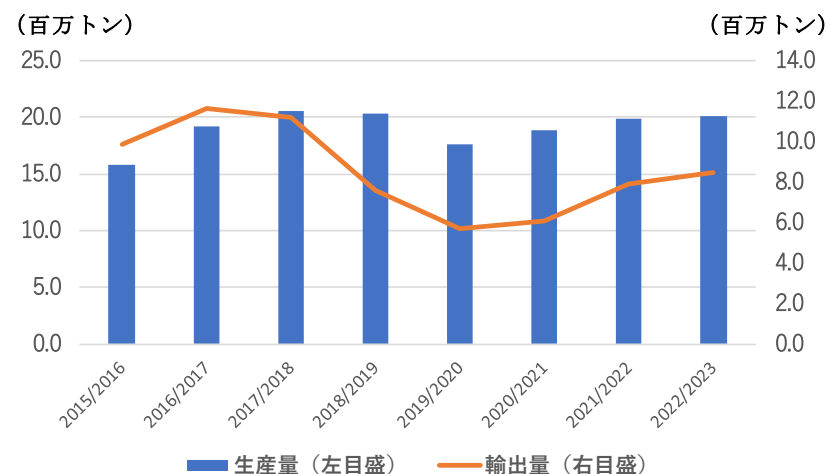
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	18.9	19.9	20.1	(19.9)	-	1.1
消 費 量	12.7	12.8	12.8	(12.3)	▲ 0.1	-
輸 出 量	6.1	7.9	8.5	(8.3)	0.3	7.6
輸 入 量	0.2	0.1	0.2	(0.3)	-	15.4
期末在庫量	4.3	3.6	2.5	(6.6)	▲ 0.5	▲ 29.3
期末在庫率	22.8%	17.3%	11.9%	(31.8%)	▲ 2.5	▲ 5.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85	(10.70)	-	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.81	(1.86)	-	-

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022) (単収は精米t/ha)

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2022.12.9) をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 中国やインドネシアからの需要が増加

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 1.1%増の 27.2 百万トンの見込み。

なお、2021/22 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が 5 年連続で減少し、2006/07 年度以来の低水準となったことから、対 2020/21 年度比 1.8%減の 26.9 百万トンの見込み。なお、高収益作物（果物・野菜・養殖）への転作等により、冬春作の収穫面積が減少したことや、メコン川の水量低下に伴う海水逆流による塩害の発生が、長期的な面積減少の主要因となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 17.5%増の 7.4 百万トンの見込み。背景には、中国への予想以上の輸出増大や、インドネシアが 2022 年末の政府備蓄目標水準（1.2 百万トン）を満たすために、今後輸入を増やすと予想されることが要因。

2022/23 年度の輸出量も、中国やインドネシアへの輸出が拡大するとの予測から、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対前年度と同水準の 7.4 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～11 月の輸出量は 609.6 万トンで、上位からフィリピン（274.7 万トン）、中国（75.7 万トン）、コートジボワール（59.0 万トン）となっている。うち、ジャポニカ米は 21.8 万トン。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ベトナムのコメ輸入量の 4 割近くを占めるインドの輸出規制等により、対前年度比 50.0%減の 0.7 百万トンの見込み。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2022.12.9）によれば、ベトナム産米（長粒種、5 %碎米混入）の 12 月 6 日までの週の価格は、11 月 8 日までの週の価格から 19 ドル/トン上昇して 450 ドル/トンと、2021 年 6 月以来の高水準となった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

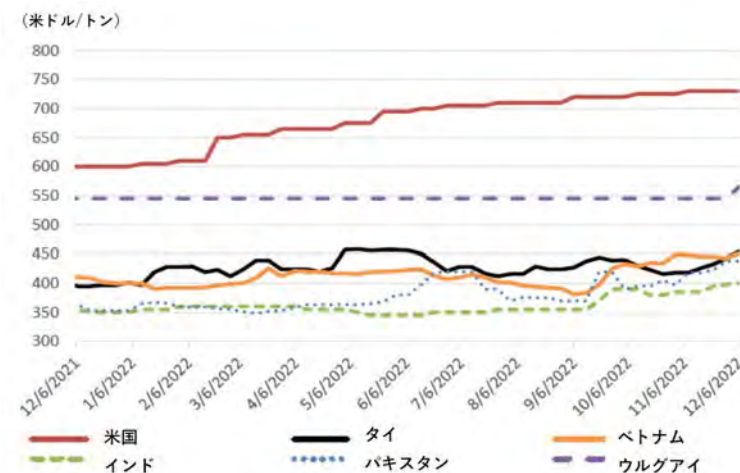
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	26.9	27.2 (28.3)	-	1.1	
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (22.3)	-	-	
輸 出 量	6.3	7.4	7.4 (6.8)	0.2	-	
輸 入 量	1.8	1.4	0.7 (0.6)	-	▲ 50.0	
期末在庫量	2.6	2.1	1.1 (2.6)	▲ 0.6	▲ 46.6	
期末在庫率	9.5%	7.2%	3.8% (8.9%)	▲ 2.1	▲ 3.4	

（参考）

収穫面積(百万ha)	7.31	7.27	7.28 (7.22)	-	0.1
単収(もみt/ha)	6.00	5.93	5.99 (3.92)	-	1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)（単収は精米t/ha）

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」（2022.12.9）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インド、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

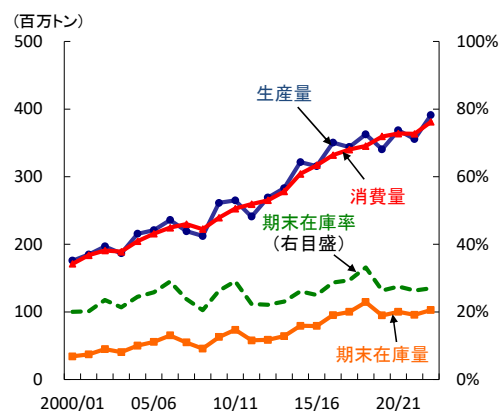
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正も、インド、アルジェリア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・カナダ等で下方修正も、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2022. 12. 9）をもとに農林水産省で作成

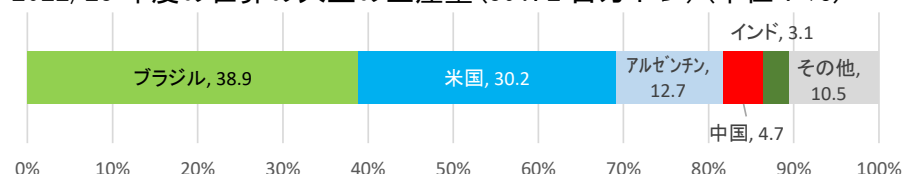
◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

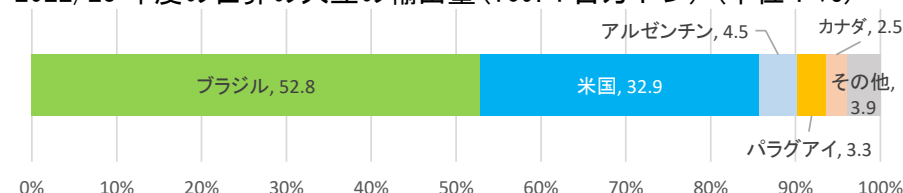
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	368.5	355.6	391.2	0.6	10.0
消費量	363.8	363.4	380.9	0.7	4.8
うち搾油用	315.4	314.8	329.3	0.0	4.6
輸出货量	165.0	153.8	169.4	0.2	10.1
輸入量	165.5	157.1	166.2	▲ 0.1	5.8
期末在庫量	100.0	95.6	102.7	0.5	7.4
期末在庫率	27.5%	26.3%	27.0%	0.1	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 December 2022）

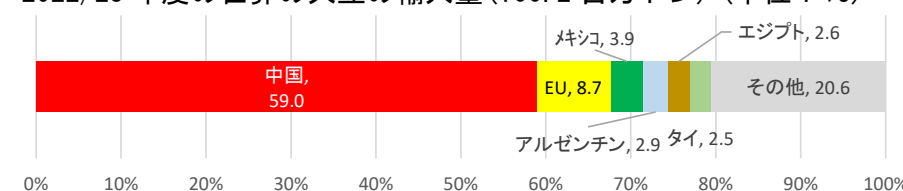
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (391.2 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出货量 (169.4 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (166.2 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より2.7%減の118.3百万トンの見通し。

11月中旬時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.7%増の64.5百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.2%減の55.7百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高（2022年1月6日～12月1日）は、47.3百万トンであり、内訳は中国（25.1百万トン）、メキシコ（4.9百万トン）、エジプト（2.8百万トン）、ドイツ（2.4百万トン）、日本（2.0百万トン）の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量減少と消費量増加から前年度より19.6%減の6.0百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は5.0%で、前年度を下回っており、期末在庫量、期末在庫率とも2015/16年度以来の低水準の見込み。

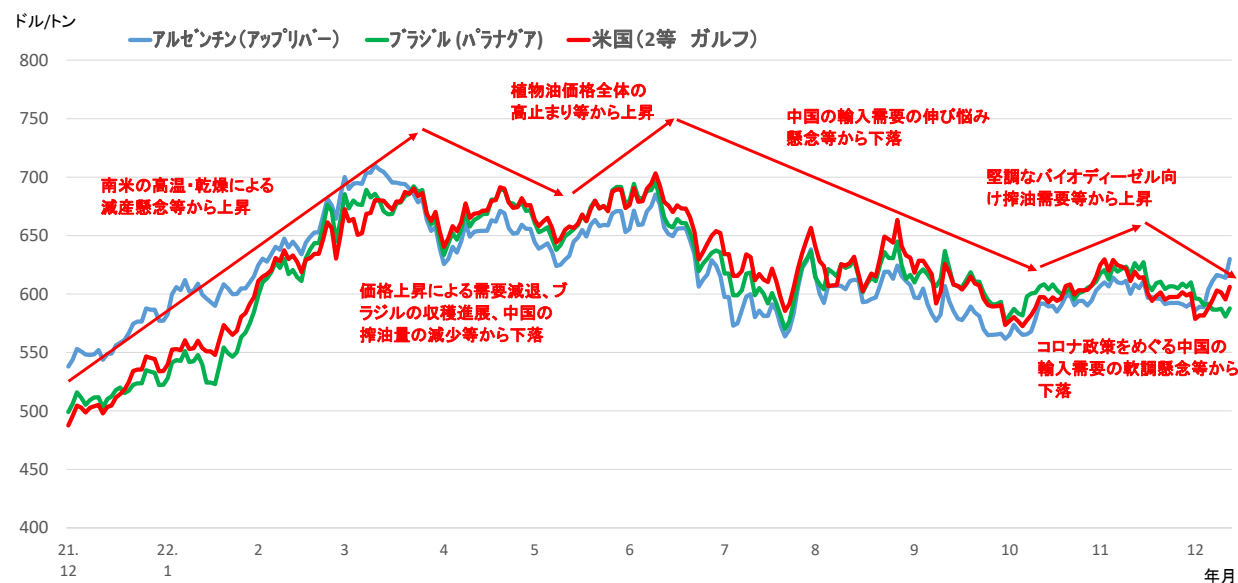
大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年9月～23年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	114.8	121.5	118.3	-	▲ 2.7
消 費 量	60.9	62.8	64.5	-	2.7
うち搾油用	58.3	60.0	61.1	-	1.9
輸 出 量	61.7	58.7	55.7	-	▲ 5.2
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	-	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	6.0	-	▲ 19.6
期末在庫率	5.7%	6.1%	5.0%	-	▲ 1.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	35.06	-	0.4
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.37	-	▲ 3.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（9 December 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、前年度より19.7%増の152.0百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2022.12.8）によれば、2022/23年度の実産量は、ラニーニャ現象から南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より22.2%増の153.5百万トンで史上最高の見込み。

12月上旬から中旬にかけて主要産地の大半で生育に必要な降雨があり、土壌水分が補給されたものの、ブラジル南西部では高温・乾燥傾向となっている。南部のパラナ州で12月12日現在、作付けが終了し、90%の作柄が良好。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で12月15日現在、作付進捗率は85%で、開花段階は1%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.5%増の55.4百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加から前年度より13.1%増の89.5百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～11月の輸出量は77.0百万トンで、前年同期（83.4百万トン）に比べ7.6%減となっている。内訳は、1位が中国52.5百万トン、2位がスペイン3.3百万トン、3位がタイ2.6百万トンとなっている。なお、11月の輸出量は2.6百万トンで前年同月（2.6百万トン）と比べ、2.1%増となっている。

大豆－ブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	127.0	152.0 (148.5)	－	19.7	
消 費 量	49.9	54.0	55.4 (54.1)	－	2.5	
うち搾油用	46.7	50.8	51.8 (51.0)	－	2.0	
輸 出 量	81.7	79.1	89.5 (91.4)	－	13.1	
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.4)	－	38.9	
期末在庫量	29.4	23.8	31.7 (5.4)	0.5	33.2	
期末在庫率	22.4%	17.9%	21.9% (3.7%)	0.3	4.0	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	42.90 (42.89)	－	3.4
単収(t/ha)	3.53	3.06	3.54 (3.46)	－	15.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC「Grain Market Report」(17 November 2022)

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2022.12.8）

< アルゼンチン > 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.7 倍（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より 12.8%増の 49.5 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.12.15）によれば、12 月上旬に産地で降雨があったものの、2022/23 年度の作付進捗率は 51%で、長引く高温・乾燥により、過去 5 年平均（70%）より 19 ポイント遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 2.1%増の 47.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度より 2.7 倍の 7.7 百万トンの見込み。この要因としては、大豆及び大豆製品輸出に適用された 9 月末までの為替優遇措置に続き、2022 年 11 月 25 日にアルゼンチン政府は、足元の公式為替レート（165 ペソ/ドル）に対し 11 月 28 日から 2022 年末まで大豆及び大豆製品輸出に適用される為替優遇措置（230 ペソ/ドル）の再導入を発表したことで、輸出は堅調に推移するとみられることによる。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～10 月の輸出量は 456.6 万トンで、前年同期（533.3 万トン）より 14.4%減。内訳は、1 位が中国 407.3 万トン、2 位が米国 11.0 万トン、3 位がチリ 4.6 万トン。10 月の輸出量は 211.7 万トンで、9 月の為替優遇措置による農家売り渡しの増加に伴い、前年同月（35.6 万トン）の 6 倍となった。

アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%に設定。さらに、2022 年 3 月 19 日付けアルゼンチン農牧水産省プレスリリースによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げ、大豆と横並びの 33%に変更した。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	43.9	49.5	(48.0)	-	12.8
消 費 量	47.4	46.0	47.0	(48.1)	-	2.1
うち搾油用	40.2	38.8	39.8	(42.1)	-	2.4
輸 出 量	5.2	2.9	7.7	(4.4)	0.5	169.2
輸 入 量	4.8	3.8	4.8	(4.8)	-	25.0
期末在庫量	25.1	23.9	23.5	(3.2)	▲ 0.5	▲ 1.7
期末在庫率	47.6%	48.9%	43.0%	(6.0%)	▲ 1.3	▲ 5.9
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	16.50	(16.65)	-	3.8
単収(t/ha)	2.81	2.76	3.00	(2.88)	-	8.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(9 December 2022)

IGC「Grain Market Report」(17 November 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の圃場風景 (12月4日撮影)

11月中旬に作付けされ、収穫は2023年4月上旬の予定。
初期生育段階。



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】中国国家统计局「2022 年糧食生産量データ」(2022.12.12)によれば、2022 年の生産量は、前年より 23.7%増の 20.3 百万トンで史上最高の見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆生産奨励策で収穫面積が増加したことから、前年度より 12.2%増の 18.4 百万トンの見込み。

11 月上旬時点で、収穫はすでに終了。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（経済成長の減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）から回復することにより、前年度より 8.7%増の 116.6 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 7.0%増の 98.0 百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022 年 1～10 月の輸入量は 73.2 百万トンと、前年同期比で 7.5%減。内訳は、ブラジル産 49.3 百万トン（67%）、米国産 20.2 百万トン（28%）。今後は、米国の収穫の終了に伴い、輸入先が徐々に米国産に切り替わるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 10 月号」によると、10 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,520 元/トン）から下落し、6,480 元/トンとなったものの、依然として高水準で推移している。主な要因は、収穫が終盤となり、10 月上中旬から市場に集中的に出荷されているが、新穀大豆は小粒で、タンパク質含有量が全体的に前年度比 2～3%低く、市場関係者の多くが買付に慎重となったことによる。なお、新穀大豆は豊作で、供給は増加しており、今後、小幅に下落するとみられる。10 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、米国ミシシッピ川の水位低下による輸送コスト上昇と人民元安を受け、5,600 元/トンと前月（5,260 元/トン）から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

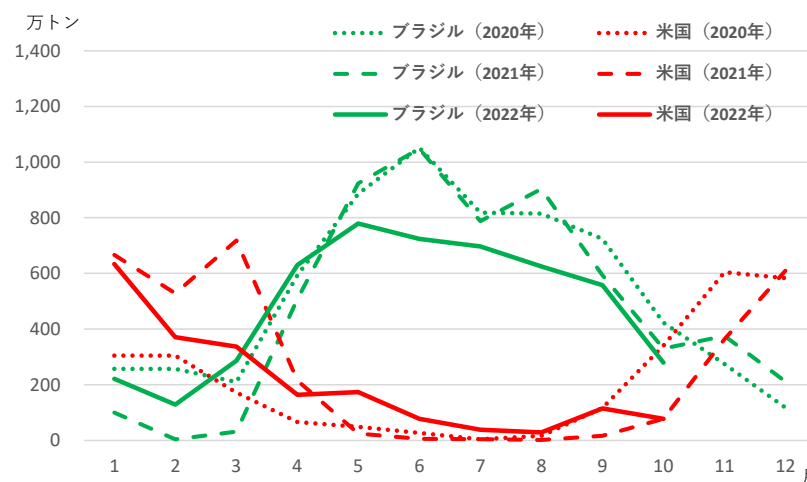
大豆—中国

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	18.4 (19.5)	-	12.2
消 費 量	112.7	107.2	116.6 (114.7)	-	8.7
うち搾油用	93.0	87.5	96.0 (96.0)	-	9.7
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
輸 入 量	99.7	91.6	98.0 (95.8)	-	7.0
期末在庫量	31.2	31.8	31.5 (29.5)	-	▲ 0.9
期末在庫率	27.6%	29.6%	27.0% (25.7%)	-	▲ 2.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	9.35 (9.90)	-	11.3
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	-	1.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2022)
IGC 「Grain Market Report」(17 November 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収の増加により増産

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、以下のカナダ統計局生産データを反映し、前月予測からわずかに上方修正され、収穫面積は減少するものの、単収の増加から前年度より4.3%増の6.5百万トンの見込み。11月中旬時点で、収穫は終了。

なお、カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2022」(2022.12.2)及びその生産データを反映したカナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.12.16)によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より0.7%減少した。一方、単収は、西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、カナダ全体の単収は前年度より5.1%増となった。前年度において高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より58.7%増と史上最高の単収となり、生産量1位のカナダ東部のオンタリオ州の単収の減少をカバーしたことが要因。この結果、生産量は前年度より4.3%増の6.5百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度より9.0%増の2.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測から0.2百万トン下方修正され、前年度より1.8%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23年度(2022年8月～2023年7月)のうち、2022年8～10月の輸出量は64.6万トンで、国別では、中国(32.3万トン)、イタリア(12.0万トン)の順である。新穀の収穫を受け、10月の輸出量は60.3万トンと8～9月の4.4万トンから大きく増加した。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

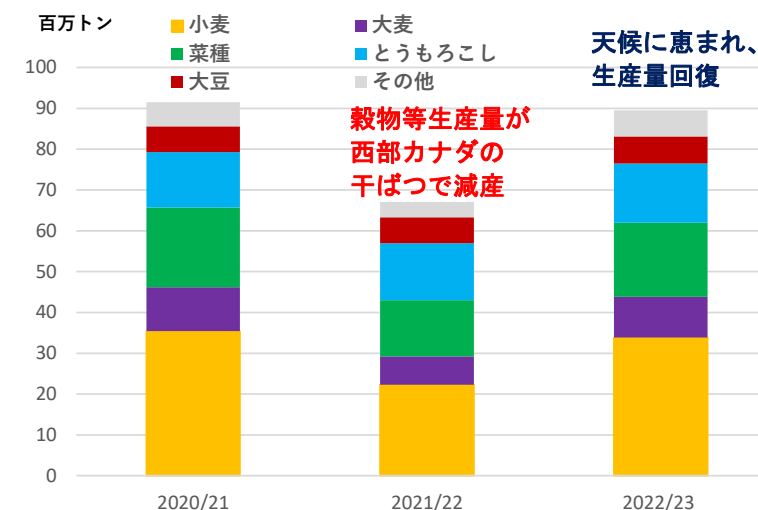
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.4	6.3	6.5 (6.5)	0.0	4.3
消 費 量	2.5	2.4	2.6 (2.5)	0.2	9.0
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	－	0.3
輸 出 量	4.7	4.3	4.2 (4.4)	▲ 0.2	▲ 1.8
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	－	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.7 (0.4)	0.1	52.1
期末在庫率	4.1%	6.4%	9.5% (5.1%)	1.4	3.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.12 (2.12)	0.02	▲ 0.5
単収(t/ha)	3.12	2.94	3.09 (3.09)	▲ 0.01	5.1

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(9 December 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(16 December 2022)

図 過去3年のカナダの穀物・油糧種子生産の推移



出典：カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2022」

(2022.12.2)を農林水産省で加工

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリクトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリクトン	大麦	
	0.025401	メトリクトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリクトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリクトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 12 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--